
うらやま

マーカス K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うらやま

【Nコード】

N1783F

【作者名】

マークask

【あらすじ】

大学の夏休み。連日田舎の同級生と飲んだくれていた俺は、ある朝起きてみると見知らぬ場所に。いや、よくよく辺りを見回してみると、ガキのころよく遊んだ裏山だ。対岸には異常に無口な同級生が。俺はここから出れんのか？

第一話

タンクトップとハーフパンだからか、知らないうちに虫に刺され
たみたいでアチコチ痒い。通気性と機動力を重視するのが夏におけ
る俺のファッションの定番なんだけど、とーぜん、山登りには向く
わけない。山つていつてもそんなちゃんとした山じゃなくて俺ら
中ではドラエモンに出てくる裏山みたいに思いつきりお手軽感があ
ったから「ドラ山」なんて呼ばれてたのは小学校二、三年の間だけ
で、しかも俺以外でその呼び方してたのは田中と鈴木ぐらいで、つ
まり…まったく流行んなかった。

そんな、小っちゃいころから登りなれている、まあ登るってほど
の意識もなかったけど、裏山に昨日の深夜未明からいる…と思う。
つーか今さつき起きたばつかだから状況わかんねーよ。見覚えのあ
る川があるからあの山だつていうのはわかんんだけど、ああ、体の節
々が痛え、それに痒いし。よくこんな砂利の上で寝てたよな。って
いうか何でこんなとこにいるんだ？ オワツ！ 対岸にだれかいる
よ。死んで…はないよな、何かビミョーに動いてるし。うーん、わ
かんねえ、何でこんなとこにいんだよ。まてよ、とりあえず冷静に
なるう、ちゃんと考えよう。昨日の夜は確かクラス会でえ、それで
居酒屋でかなりハイペースで飲んだあとお、佐藤に連れられてえ、
あいつが行きつけの店に行つてえ、そこで歌つて飲んでえ、三十代
半ばに見えなくもないけど化粧落とすかどうか？ っていうママ
さんに恋愛の相談にのつてもらつてえ、多分二時ぐらいたつたかな、
閉店だからということとで店を出てえ、んっ？ 今何時だ。ケータイ、
ケータイ…ない。ヤッバーどつかで落としたかな、たぶん二件目だ
と思うんだけど、今年入つて二回目だよ、ハア…誰か拾ってくれて
るかなー。それで佐藤と別れてえ、あつ、佐藤がお金払ってくれた
んだ。同級生でも働いてるやつはちがうよ。大学生は気楽なもんだ。
そんでその後、そうだ、山田に会ったんだ。山田と会ったあ？ で

もどつか店に入った記憶はないんだよなあ、ってあれ山田じゃねえの。なにやってんだよアイツこんなところで、って俺もだけど。なんで二人してここにいんの？　そしてなぜに対岸？

「山田あゝ山田あゝ起きろー。生きてるかー」

ダメだ、全然起きん。向こう行くしかないか。えゝ朝っぱらから渡んのゝ。浅いし、幅も別に広くないけどさあ、起きてすぐだぜ、もうちょっとインターバルおこよう。そうだ！　石投げて起こそう。あんま小さすぎてもダメだから適当なやつを選んで、山なり気味でとりやつ、あつ外れた。もっかい、おつ当たった当たった、でも反応なしかよ。一気に二個、一個当たった。…ダメか。えーい全部投げちまえ。おーすごい勢いで連続して当たったよ。おつ、動いた動いた

「山田あゝ山田あゝ起きろー」

よっしゃ起き上がった。

「生きてるかゝなんで俺らこんなとこいんのゝ」

こっち見てるけどわかってんのかな。あーまた寝やがったよ。ふざけやがって

「オイ、起きろ！　普通にまた寝んな」

よし起き上がった。

「なあー、なんで俺ら二人して山ん中入ってんの？　オマエと会った後ぐらいから記憶飛んでんだけど」

ジーっと見てるだけでなんも反応なしかよ。アイツはびっくりするぐらい無口だからなー。たぶん昨日もなんにもしゃべってないんじゃないねーの。

「オイ、聞いてんのか、なんか言えよ、オイ！」

ダメだ。全然なんか言う気配がねえ。ホントにアイツのしゃべらない度は無口のレベルじゃ済まされねーからな。高校のころも野球の県予選の応援練習、アイツが声ださねえから俺らんクラスはマジ先輩にしごかれまくったし。アイツはボコられても最後まで大きい声ださなかったからなー、みんな逆に感心したよ。帰るとき黒板

に「すまん」て書いて走り去っていったんだよなあ。だったら声出せよーって、みんなしてツツコンなんだ。それで次の日学校行ったら一個十円のチョコ、全員の机の中に入れてやがんの。なんじゃそりゃ！ チョコって！ 袋に山田って修正液でわざわざ書きやがって渡すんならそのまま渡せよって感じだよ。メンドくせえだろそっちの方が。んっ？ 手でこっち来いって合図してやがる。

「何様だ、オメエは、お前がこっち来い」

マジで！ まーた寝やがった。

「わかった、わかった。今行くから待ってるよ。ったく」

んー別に流れも速くねえし、浅いし、サンダルだから足濡れてもいいけど、でも濡れないように。石の上を、おお、冷てえ、やつぱ無理か。夏でマジよかったよ、冬とかだったらマジでやばかった。この水って飲めねえかな、さっきからメツチャのど渴いてんだけどいやーいくらなんでもなあ、そのままっていうのはなあ、生水を。だいたいそんな清流イメージないし。まっ、ガキンころは素で飲んでたけど。いや、あのときは勢いあったし、いや逆に今のほうが抵抗力はあるし、いや、でも。

「この水飲めっかなー」

…… ハイハイ反応なしね。んっ？ なにゴソゴソして、あっ！ ペットボトル出しやがった。

「おーいいもん持ってんじやん。俺の分も残しといて、ってなにハイペースで飲んでんだ！ オイ、バカ、俺の分も残せってば！」

信じらんねー、あのバカペットボトル逆さまにして、飲み干したことアピールしてやがる。

「ふざけんなこの薄情もん！ そっち行ったら覚えてろよ」

あー人が飲んでるの見たらよけいのど渴いてきたよ。これマジで飲めねえかな。

「うわっ！」

イッテエ、あちゃー滑っちゃったよ。うゝ手について被害は最小に抑えた・・・かな？ ズボンがちょっと濡れただけ。げっ！

下にもビミョーに染みこんできた。気持ち悪い。

「スタンドアップ」

はっ？

「スタンドアップ」

えっ？

「ステエ〜ンドアップ」

やっと喋ったと思ったら英語かよ！

「なにがスタンドアップだ。転んだんだから大丈夫？ とかだろフツ」。しかも第一声が英語かよ」

こうなったら一気に渡って一言アイツに言ってやらねば。とりあえず立って、うん、擦りむいたりはしてないな。もう濡れようが転ぼうが関係あるかー、待ってるよー山田あー！。

相変わらずな…

「おー、相変わらず開いてんだか閉じてんだか、細かい目えしやが
つて。髪型も全然変わってねえじゃん。六・四分けのミディアム。
「お前なに水全部飲んでんだよ、つーかなんで俺らここにいんの。
そのまえになんかしやべれよ」

「ジーっと思ってるんだったらなんか言ってくれないかなー、あれっ、
コイツ顔になんか細かい傷がいっぱい、

「お前、顔どうしたの？ 小っちゃい傷が、大丈夫かよ」
下向きやがった。

「昨日、俺らどうしたんだっけ。お前と会ってからはずつか店入っ
てないよな、俺かなり飲んでたからお前と会ったあたりぐらいから
記憶ねーんだけど。お前も飲んでたの？ オイ、こつち向けよ。な
んてコミニケーション能力が低いやつなんだお前は」

「うーんこりや喋りそうにないなあ。小学校から一緒だけど、声聞
いたのって、ホント数えるぐらいしかないよーな。よくそれでフツ
ーに学校生活送ってたよなあ、今から考えたら信じらんねーよ。お
つ、どうした急に立ち上がった。靴脱いで、靴下も脱いで、ジーン
ズも膝のところまで曲げて、シャツも脱いだ、うわっ！ 背中も傷
だらけだ。」

「背中も傷だらけだぞ。なんの傷だよ。ここそんな木の中掻き分け
るとこじゃねーだろ」

「なんのためらいもなく素通りされちゃったよ。」

「どこにだよ」

「って川しかないか。川に入ってたて、あー顔洗いたかったのね。」

「傷しめない？」

「…ハアゝア、気にかけるだけ無駄だなこりや。とりあえず座ろつ
と。」

「天気いいなあ、雲ひとつない、わけじゃないけどいい天気だなあ、

絶好の登山日和ってやつだよ。登る気なかったけど。チツ、やつぱ
ペットボトル空だよ。俺も飲みたかったなあ、コーラ。コーラ！
コーラ持って歩くやつなんて見たことねーよ。ぬるくなったらマズ
イだろ。まあいいや、確か降りるのに十分もかからなかっただろ
がまんしよ。にしても昨日は飲んだなー、みんなと会ったって成人
式以来か。三年ぶりだけどやつぱこの年ぐらいの二、三年はでけえ
な。就職組と学生組でだいぶちがってくるし。高校出てすぐ働いて
るやつはやっぱり大人感がでてるよ。鈴木にいたっては子供できたか
らちよつと父親感まであるもん。佐藤は今日仕事かなー、水曜だし
なー、ド平日だけど休みとってたのかな。こっちはまだ一ヶ月は休
みがあるよ。レポート執りかかんねえとなー、メンドクせえ。五つ
ぐらいあつたけ、問題は政治学論だよ。マックス・ウェーバーの「
職業としての政治」を読んで政治家の必須条件を述べよだもんなー、
あの先生シビアに点数つけるって話しだから、本丸写しはヤバイよ
な。必修科目だから落とすわけにはいかねーし。マックス・ウェー
バーってだれだよ。外資系の証券会社みたいな名前しやがって。政
治家の必須条件なんて言われてもさあ、金に汚なくて勢いのある
やつでいいじゃん。

風が気持ちいい、気を揺らす音もいい感じー、これでなんか飲む
もんさえあつたらなー。アイツは、体まで洗ってんのか。傷しみる
だろ、あれっ、今、手ですくって飲んでなかったか。…やつぱり川
の水飲んでる！

「お前チャレンジャーだな、なんの迷いもなく飲むとは」

俺も飲んでみようかな、あのヤロウ、これ見よがしに次々口のと
ころに手を持っていきやがって。…よしっ俺も飲もう。別に死にや
ーしねえだろ。

さつきは冷たいと思ったけどそうでもないな。起きたばつかだっ
たしな。今日も暑くなりそうだし、濡れたのもソッコーで乾くだろ。
手ですくって、うゝん見た感じ時はきれいだよなあ。まずは顔洗お
うっと、ぶはっ、うゝ生き返る、気持ちいいー。もっかい、ぷー、あ

「完全に目が覚めた。よしっ、いよいよ飲むか。なんとか菌とか大丈夫だろうな、いや、こんなに透明なんだから大丈夫なはずだ。んゝうめえ、水がこんなうまいのって部活やってたとき以来だよ。あのどが潤う。マジうめえよ、飽きるまで飲もー。そりゃコイツも飲むわなあ、っーかこれなんとかの天然水とかと張るんじゃない。」「この水飲めるね、っていうか全然おいしいよ。お前飲めるの知ってたの？ ペットボトルに入れて持って帰れば」

そういえば今何時だろ。

「なあ、今何時か、うわっ、バカやめろ、ふざけんな、水かけんじやねーよ、やめろって、コノヤロー、オラオラ、ハッハッハッ」
倍にして返してやったぜ。

「オメエが悪いんだからな。お前は上脱いでるからいいけどよー、俺は上濡れちゃったよ、下も乾いてないのに」

なんなんだよいたい。

「お前時計してる？ してないか、ケータイは？」

……素通りしてんじや

「ねえよ！ オイ！ いいかげんにしろよ、いくらなんでも無視しすぎだろ！ 昨日どうしたんだよ。俺がなんかやったのかよ、っーかなんで俺らはここにいんだあー」

前に回り込んだからにはなんか言うまで、ディフェンスは解かないぜ。西高のエースキラーとまで呼ばれた、自分のチームにしか言われてなかったけど、俺のディフェンスをなめんなよ。…うっ、間近で直視されると細い隙間から光る視線がちよつと怖い。なるっ、俺からは目えそらさねえし、一言も発しねえぞ。……沈黙がづらいいや瞬きできねえのはもつとづらい。こいつはいいよ、少ししか開いてねえから空気の抵抗をあんまり受けないんだよ、きっと。

川の流れる音と木の揺れる音と鳥の声かな。静かにしてるとけっこういろいろ聞こえてくるもんだな。

ポーンポーン

あれ？ 今のなんの音だ。危ねえ、気にとられて視線はずしそう

になったよ。くゝなんか言え、なんか言え、なんか言えゝ。男二人こんな山の中で見つめ合つてなにやってんだか。人が見たらどう思うよ。うゝ目に涙が溜まつてくるゝ、もう限界だゝ。せめて動けよなゝ。おつ、下向いた。勝った、勝ったぞゝ。あつ、またこっち向いた。

「覚えてないのか」

「しゃべった！」

「えつ、なにを？ 酔つてて記憶飛んでるから、昨日なにがあつたか、つゝかこつちになんでいるのか聞こうとしてんのに、お前は全然、つてだから無視して行くなよ。ちよつと待て！」

いきなりしゃべったからちよつとビックリしちゃったよ。濡れた体Tシャツで拭いてまたそのTシャツ着たら意味なくない？ その上からシャツ着んのか。それ暑いだろ。

「覚えてないのかつて、なんのことだよ。俺がなんかしたのかよ、その傷も俺のせいなのか」 長袖のシャツ暑そゝ、しかも黒だし。ちつとも夏してねえな。

「あつ、一人で行くなよ、一言かけろよな、オイ、無視すんな、なんか言えゝ」

噛み合わないっす

>ポーン、ポーン

なんの音だ。さつきから、たまめに聞こえてくるけど。あーあ、三十分ぐらいで降りれると思ってたのに全然着かないんだけど。こんなに遠かったけ？ 景色はビミョーに見覚えあんだけどなー。にしても、サンダルで山道は歩きにくい。このまま歩き続けたら靴擦れっていうかサンダル擦れになっちゃうよ。暑い、腹減った、もう何時間食ってないんだろ。居酒屋で、締め抹茶アイス食ったのが最後だから…時計がないからわかんねーよ。俺が最後に甘いもん頼むと、みんな、「えーっ」て感じになるけど、なんとわれようと居酒屋での最後は甘いもんで締めるのだ。

「道あつてのかよ」

アイツはなんで後ろに下がってんだよ。こっちがスピード遅らせて待ってやっても、それに気づいたらヤツもスピード落とすし。

「オーイ、道あつてんのかよ。お前のほうがこのことは詳しいだろうが。っていうか並んで歩けよ！」

俺やつぱなんかしたのかなあ。でもすごく怒ってるって感じではなかったけど、っていうっても表情が変わらないからわかんねーや。

アイツはガキンころから一人でここに来るので有名だったからな！。俺らは昼間でも一人では来なかったけど、大体一人で来てもなにが楽しいんだか。小学校三、四年ぐらいからは一人で来ることもあったけど、まあそれは秘密基地作るのが流行ったから、そこに行くっていうことで、山ん中一人でウロウロはしなかったよ。アイツはほとんど一人でいたから、秘密基地仲間はいなかったはずだけど、ここに来たら絶対見かけてたから、ホント一人でなにやってたんだろ、ていうのも、今思い出してみたら気になるけど、あのときは別に気にも留めてなかったなあ。

秘密基地といえば、俺らのクラスのやつらで作ったのが一番イケ

てたよ。ダンボールが主な材料だったあの時代、板やブロックを持ってきたのは画期的だったよなー、田中ん家が造園屋だったから成し得た荒業だったな。屋根にはみんな自分の家から、布やら傘やら使えそうなやつをもってきてたけど、結局、鈴木が持ってきた浮き輪やらゴムボートやらの海水浴用品が一番役にたったんだ。あとで鈴木はメチャクチャ怒られたらしいけど、もう切ってしまった後だったから時すでに遅しかったんだ。あの基地どうなったんだっけ。雨が降っても大丈夫な優れものだったんだけどなー。

「なあ、俺らが小学生のとき作った基地ってここら辺だったけ？ お前覚えてない」

って水飲んでる！ あのヤロ、ペットボトルに水入れてたのか。いつの間に。ヤバイ、あのペースはさっきと同じで一気に飲み干す気だ。

「お前も飲まない？ ぐらいの一言もねえのかよ！ オイ、何事もないかのように飲み続けるな。あーもう」

直接取りに行くしかねえ、くそ！ サンドルは走りにくい。

「ペットボトル没収、なんだよ、もうちょっとしか入ってねーじゃん。全部もらうぞ。ぬるっ！ 冷たくなかったらフツーの水だな、こりゃ」

なんだよ、ジーンと見やがって、

「お前さあ、俺にも分けようっていう発想はねえのかよ。この暑さだから、アイツものど渇くだろうなあとかって考えないわけ？」

オーコノ人表情変ワラナイヨ、感情ナイネ。あっそうだ。

「Are you Yamada？」

「…えっ？」

クノヤロ

「お前が全くしゃべんねえから、こっちは、お前さっき英語でスタンドアップとか言ったときは、やたらとはっきりした口調だったから、お前こっちはなあ、ちよっと英語で言ってみたらどうだろうと思っただんだよ。そしたら、えっ、て。素で返しやがって。しゃべれんな

ら、はじめっからしゃべろ！」

「わかった、わかった。肩をつかむな肩を」

余計な手間かけさせやがって。ちよつと恥ずかしかったよ。なん
で俺も英語なんかで言おうと思ったんだろ。くゝなに澄ましてんだ、
このヤロー、俺だけが無駄にテンション上げてバカみてえじゃん。
あーもう、シャツの肩のところのシワを気にするなシワを。思っ
てるほどパリッとしてなかったぞ。

「で、道はあつてんのかよ」

「お前がまえ歩いてたから俺はお前に付いて行っただけだ」

ふつつーのトーンで言いやがって、だから肩のところを触んなよ
なー、嫌味ったらしい。

「俺はもうずっとここには来てねえよ。だから、さつきから道あつ
てるか聞いてんのに、お前はなんのリアクションもないしよー。大
体、並んで歩けよな、俺がスピード落としたら、なんでお前までビ
ミョーにスピード落とすんだよ、付かず離れずってなんの尾行だよ、
って人が話してるときはこつちを向けえ！」

あつ首無理やりこつち向けたらグキツて。

「痛い。力、加減しろよ、今グキツて」

「お前がこつち向かないで、違つとこ向くからだろーが。人が話し
てるそばから違つとこ向くとはどういう神経してんだ」

うつむいたまま首さすって、ちよつとやりすぎたかなー。

「とりあえず、ここまで一本道だから間違えようもないし、早く先
行こーぜ。腹も減ってるし」

空腹とケータイと相方と

はあ、暑いわ、腹は減るは、足痛いわ、相方はしゃべんねーわ。早く家に帰りてえー。お母さん心配してるかなあ、夏休みで帰ってきたと思ったら毎晩毎晩朝帰りしてちゃーなあ。よし、今日はずつと家にいて家族団らんってやつでもしてみるか。夕飯になかなあ。カレーだな、カレーをリクエストしよう。うちのカレーは肉ケチケチせずニふんだんに入れるからな。野菜より肉のほうが多いなんてわが母ながらイケてるぜ。隠し味に生クリーム入れてるみたいだけど、あれはやっぱり意味あんのかな。ポテトサラダも作ってもらおう。あ、よけいに腹減ってきた。カレーのことなんか考えるんじゃない。あ、よかったよ。後ろを振り返ってみれば、もう差ができてるじゃん。人の話し聞いてんのかアイツは。あー知らん知らんあんなやつ。

暑。太陽が真上、よりはちよつと傾いてるところにある。今ちようど一時、いや二時ぐらいかな。ケータイは、あつ、そっか忘れてきたんだっけ。店の人、キープしてくれていると信じてるぞ。

「お前、ケータイ持ってる、今何時」

腕時計はしてなかったはずだけど。ポケットごそごそして、おっ持ってるばいな。なんか、いじってるみたいだけど、あれっ、両手で×ってどういうこと。

「電池ないのかあ？」

なんか身振り手振りしてるけどわかんねえよ、っていうかいちいち立ち止まんなよな。あーもう、こっちから行かないとダメか。足痛いのになんか戻らせやがって。このサンダルあわねえなあ。家にあるのとりあえず履いてきただけだから。まさか山道歩くとは思わなかったし。

「どうした？」

シャツ長袖マジ暑そー。

「ダメだ。アンテナバリゼロだ」

「なんだ、バリゼロって。バリサンとかは言ってたけどさあ、アンテナないのをバリゼロなんて言わないし。そのバリはなんのバリになんだよ」

バリゼロって。なんだよ、そのオリジナルワードは。おーなんだなんだ、ケータイすごい勢いで振り出したよ。

「全然、入りそうにないな」

「ハハッ、振ったってかわんねえよ。まだ、そんなことしてんのかよ」

気持ちはわかるけどな。俺もたまにやつちゃうし。

「まあいいや、入らないならしかたない。とりあえず並んで歩けよ。二人しかいないんだから」

しかし、あんなに振るかなケータイを。電波入んねーんだなここは。今どきなあ。家に連絡できねえな。まっ、あと少しで着くだろ。まあだケータイいじってる。電波入んないと言っておきながらいつまで

ポーン、ポーン

「あっ、今の音ってなに、なんの音？なんか、ちよくちよく聞こえてこない」

「…うん」

ハイハイ、ケータイいじるので忙しいと。まったく興味なしということで。でもなんの音だろ。にしても時間がわかんないっていうのもなんだか落ち着かねえな。起きてから一回も時計見ないなんてそうないし。俺、なに落としてんだよ。腕時計しないしなあ。っていうか周りもあんまりしてない感じがするけど、ケータイが時計代わりだもん、最近は。いったいどこまで進化すんだケータイ。着メロもはじめ三和音だったのに、十六和音になって、今じゃ何百和音とかになってるし。そのうえ着歌って！鳴ってもちよっと聴いちやうし。写真も画質どんどんよ良くなっていくもんなあ。ほとんどデジカメだよデジカメ。デジカメの売り上げ落ちてんじゃねえの。いや、それよりも動画が標準装備だし。ああいうのはなあ、よからぬ

ことに使うやつがなあ……こいつもそうだったりして。おわっ！一瞬目があっちゃったよ。ビックリしたー。なんなんだいったい。計算機は昔っからついてるし、辞書はサイトにあるけど、フツーに付いてくるかもな。英語の方も。おおっ、そしたら電子辞書の役割までそりゃ、試験のとき持ち込んだらダメだよ。あとは、テレビは……あるか。そのうち、ＡＴＭとかでピッて合わすだけで、お金おろせるようになったり、免許証とか、あと、じゃあパスポートも、すげえなケータイ、なんでもありじゃん。でもなおさら落としちゃダメじゃん。

「ケータイってホント機能ふえたよな」

「俺は、メールと電話だけでいい。というかメールだけでいい」

「いやいや、メールだけじゃ電話じゃないじゃん。ケータイメールとでもいうのかよ」ケータイいじったまま、こっち向こうとすらしない。

「お前な、世間はお前みたいになったくコミュニケーションとらないうってわけにはいかないんだよ」

ふうーもういいや。会話になんねえよ。あー足痛え。ちよつと脱いで見てみようつと。

「肩かして」

つて言っても無視すると思ったからつかんでから言う。

「動くなよ」

ため息つくくなよなあ、そんぐらいで。うわー皮めくれてるよ。あー見るんじゃなかった。

「足痛いと思ったらさー、皮めくれてるよ。お前は靴だからいいよな、俺サンダルだから」

肩離した瞬間シワを気にしやがって。どーせ俺の足のことは流すとは思ってたけどさあ。言っとくけどそのシャツ砂利の上で寝たせいでけっこう汚れてんだよ！ しかも黒だからよけいに目立つし。あーマジ見るんじゃなかった。気になっしょうがねーよ。

「ちよつとペース落とさない？」

だからため息つくなよな。

「足痛いんだもん。ずっと人の後ろ歩いてたんだから別にいいだろ。そんなくらい」

なんだよ、コイツは。マジむかつく。あーもう！早く家に帰りてえよ。

チヨツ、コレート

「ちよつと待て、待てったら！」

どんどん先行きやがつて。こつちのペースが遅れても待つどころか振り返りもしねえよ。俺はアイツを待つててやったのに。でもこの痛みはちよつとヤベェかも。また見てみようかな。いや、やめところ。見たらよけいへこむ。やっぱサンダルはきついよ。っーか全然着く気配がないんだけど。もう一時間以上は歩いてない？ 暑いし腹減ったし、その前にのど渴いたよ。ペットボトルのはさつき全部飲んじゃったし。また川に戻るにはもう遠すぎるし。こんなことならもつと大事に飲むんだったよ。まさか、こんなに着かないもんだとは思わなかった。アイツはホント、振り返るそぶりすら見せねえな。電波入んないっていつておきながらまだケータイいじってるし。電波入んないんだったらメールもこないだろ。にしても今何時ぐらいだ。太陽は真上ではないけど、陽射しはまだ勢いがあるから二時ぐらいかなー

…そんな太陽の位置で時間を予測するなんてできるかよ！ 小学校の理科の実験じゃあるまいし。あのときだつて棒の影を見てたんだよ。うーん、まさか道まちがつてはないよな。ガキのころだつて迷ったことなんてないのに。だいたい、一本道なんだから迷いようがねーよ。それとも、これぐらい遠かつたのかな。なんせ、小学校五、六年あたりから来てないから、十年ぶりぐらいか。でも、やっぱり見たことあるような景色なんだけどなあ。誰か通んないかな。平日だしなあ。いや、休日でも来ねえか。それだつたら、こつちじゃなくて、緑ヶ丘公園のほうが広場とか遊具もあつて整備されてるもんな。最近のガキも、ここには来ねえんじゃないか。でっかいゲーセンもあるし、あとフットサルコートまで。塾もやたら増えたし。俺らのときとはだいぶちが

ポーン、ポーン

あつ、また鳴った。今のは小さかった感じがしたけど、離れてんのかな。どこから聞こえてんだろ？ 木で向こうっ側は全然見えないし。さっきから、思ってたけど、ここの木ってこんなに高かったけ。もしかして、いつのまにか植林とかしたのかな。いや、そんなのやってるって聞いたことないし、やってたとしても木が育つのに何年かはかかるはずだし。足痛えな。下が舗装されてたらもっと歩きやすいのに。あつ、でも環境的にまずいのかな。うんっ？ なにこれ。チョコレート袋？ あつ、あっちにも。あつ、もうひとつ。今まで、こんなゴミ落ちてなかったのに。どんどん続いてる。もしかして… ああ、やっぱり！ なんか、アイツのそこから落ちててる。山田のヤロ、一人で食べ尽くす気だな。水のとときいい、なんで、アイツには分けようっていう発想がねーんだよ。

「山田あ俺にもよこせえ！」

痛え、全力で走るとマジ痛えよ。ちよつと足引きずり気味だし。でも、チョコレートをゲットするためなら。

「オイ！俺にもよこせよ」

って、うっそー走り出したよ。

「待て、待て、待てったら！」

コイツは足は速くなかったはず。今の俺でもなんとか、あともうちよつとで肩に手が、ってつかんだ瞬間振り払われたよ！ チョコレートごときでどんな人だよ。

「チョコレートなんかで振り切ろうとすんなよ。俺、マジで足痛いんだって！」

おっ、立ち止まった。振り返って、なんか投げた。でも、全然届いてねーじゃん。痛えー、ダメだもう歩こう。向こうも歩きだしたし。

つたく、ムダな体力使わせやがって。あつ、銀色の紙、チョコレート投げたのか。いちいち屈ませやがって、んっ、頭になんか当たった。もう一個投げたのか。今度は緑色。

「投げないで、フツーに渡せよ。って、言ってるそばから投げんな

！
」

なんか、いっぱい投げてきたな。ムツチャばらけてんじゃん。赤に、黄色に、また銀、で青か。全部同じ紙だから、お得用パックのやつだ。全部で六個か。けっこうくれたな。

「じゃあ、頂くわ。サンキュー」

まずは、なんにしようかな。うゝん、赤。うわあ、溶けてドロドロ、この暑さじゃあな。袋からとれないから直接、あ、鼻についた、ウゝ甘い、溶けててもオイシー。中はキャラメルか、口ん中グチャグチャ。口の中の水分全部もってかれた感じ。水飲みてえ。でも、もう一個、次、緑。これは…アーモンドだ。キャラメルよりはこっちがいいけど。のど渴くゝ。でも止まらない。銀色は…なにも入ってないや。歯ごたえあるのがいんだけどなあ。ダメだ。もうこれ以上は口の中が受け付けん。ああゝみずゝ。こんなことなら、さっきの水もつと大事に飲めばよかった。まさか今ごろになつてこんなにレア度が増すとは。残りのチョコレートはとっておいて。それにしても、アイツポケットにずっと忍ばせてやがったのかよ。腹減ってんだから、もっと早く出せっていうんだよ。つーか川のところで出せ！

どんなケータイだよ

アイツ、なんの迷いもなく進んでるけど道あってんのかな。って
いっても一本道だし。どっか見落としてないよな。いやいや、ガキ
んころから確かに一本道だったはずだ。もー、のどの渴きと腹が減
ったのと足が痛いのと疲れたのと暑いのと、なんかいろいろ混ざっ
て、よくわかんねえよ。アイツは疲れないのかな。しゃべんねーし、
表情も変わらないし。もうどんくらい歩いたんだろ。風景があんま
りかわないと、進んでる実感がわかないな。そのまえに、今、何
時だよ。それすらもわかんないから、なおさらだよ。ケータイ落と
さなきゃなあ。アレツ？ アイツケータイ持ってたじゃん。なん
か、電波入んねえとかいうからそっちに気にとられてたけど。別に
時計見るのと電波はなんもカンケーないじゃん。俺、一言も「電波
入る？」とは聞いてないよな。なのに、アイツはバリゼロとかわけ
わかんねーこと言いやがって。っーか気付けよ俺。

「オイ、今何時だよ。お前、俺は時間が知りてえんだよ。だれが電
波が入るか聞いたよ」

振り返ってケータイ突き出されても

「バカ！見えるわけねえだろ」

腰に手えあててなにかっこつけてんだ。

「なんのポーズだよ。今、行くからちよつとそこで待ってる」

マジ疲れる。アイツといると。まあ、時間知ったからってなにが
どーなるわけでもないけど。二時半ぐらいかなあ。もう、チヨコレ
ート食べるのはいいけど、袋フツーに捨てていくなよなあ。言っ
てるそばから

「チヨコレートの袋捨てんなよ。ちゃんと自分で持ってるよ」

俺はちゃんとポケットに入れてるのに。だから、なんでケータイ
いじってたんだよ。自分で電波入らないって言つといて。ケータイ振
ってもかわんないって言ってるだろうが。通ったあとにチヨコレー

トの袋捨てていきやがって。しかも、なんで紫ばつかなんだよ。なにが入ってたんだよ。俺にはあげないで。なぜに俺がアイツの落としてったゴミを拾いながら歩かないかんだ。あつ、色がオレンジになった。ここで紫切れたんだな。そして、オレンジが続く。って俺にあげたのには入ってない色ばつか食いやがって。

「偏りすぎなんだよ！俺にもその色食わせろ」

ってオレンジも切れたよ。

「で、今何時？」

うわっ、

「いきなり目の前に突き出すなよ。口で言えばすむことだろ」

ったく。

「これ、誰？ グラビアかなんかの人？ 見たことないんだけど。あんまり可愛くねえな。時計でてないじゃん。うんっ？ これロツクかかってなくない？ キー操作無効になるんだけど」

このヤロ

「チョコレート食ってないで、解除しろ！ 人に渡しておきながらロツクかけてるとは、なに考えてんだ」

肩ガツクリ落とすなよなあ、相手してるこっちの身にもなれつつーんだよ。

「解除できた？ ついでに時計も表示させろよ」

いちいち、ケータイ閉めんなよな。どーせすぐ見るってわかってんのに。液晶の文字デカッ！

21:33

「……全然あつてねーじゃん！なんでズレてんだよ。つーかあわせらるだろフツ

ー」

うつそー、マジで。ケータイの時間あつてない人はじめて見たよ。「お前、よりによってこんなときに。はあー、なんかマジー気に疲れたよ。ほらよ。家帰ったら時計あわせとけよ」

あーもうなにコイツ。もういいや、時間なんかどーでもいい。と

にかく先に進むしか

「だから、ケータイを振るなよ。それで時間合うのかよ。もう行こーぜ」

あとどんくらい歩いたら着くんだよ。足痛あゝ。

「俺足けつこつやバイから、俺にあわせて歩いてくれない。だいたい、お前が、さっき逃げたから追いかけてよけいひどくなつたんだよ！」

「わがまま」

「なんだとおゝこつちはお前のせいでいらぬ苦勞をしてんのに、お前がもつとフツーにしてくれたらなー、物事はもつとスムーズに、なんだその顔は！」

口開けたままで、ふざけた顔しやがつて。ハハッ、一步引いてやがんの。また、肩つかまれると思つて、それ警戒しすぎだから。

「落ち着けよ。甘いものでも食つて。甘いものは精神を落ち着けるんだから」

紫色のチョコレート渡されたけど、まだ持つてたのか。

「紫のやつが好きなんじゃないの。俺まだ持つてるから食べば」

ちよつとは反省したのかな。まっいいや。せつかくだからもらつとこー。甘いものがイライラを抑えるかは知らないけど、紫になに入ってるのかは気になる。

「行こうつてぐらい言えよ。いや、こいこいじゃなくて」

ホント、一言がないよなー。

「ゆつくり、行こうつぜ」

と肩をつかむ。ほゝらシワを気にしだした。

「気にすんなよ、シワぐらい。クリーニングだしやあいいだろ。どうせ汚れてんだから」

うわゝすつごくいやな顔してる。目が細いから口に表情がでんだな。

「チョコレート食つて心を落ち着かせればあ」

「チッ」

えゝ舌打ちされたよ。お前が甘いものは心を落ち着けるって言ったんだろーが。腹立つなー。いかん、いかん。いちいち気にしてたら。心を落ち着けるためにもさっそく紫色をいただきますか。この溶けてるのはなんとかなんねえかな。こ、れ、は、スースーする。ペパーミントじゃん！俺、チョコレートにこういうやつ入れるのダメなんだよなー。ガムとかだったら大丈夫だけど。しかも溶けてるからおさらタッチわるいよ。なんで、こんなのが好きなんだよ。ハズレわたしやがって。じゃあ、今食べてるオレンジはなにが入ってたんだ？ あっ、またゴミ捨てたよ。

「ゴミ捨てんなって言うてるだろ。あと、なにミントが入ってたんのわたしでんだよ。っーかなんでそれが一番好きなんだ」

素直にゴミ拾ったよ。

「そうだぞ。ゴミ持ち帰んのは常識だぞ常識」

「お前は、小学生のころは平気で空き缶やお菓子の袋をここに捨ててたくせに。川にだって捨ててたじゃないか」

「今さら、なにを、ガキのころの話しだろーが。だから、こうして今は地球に優しい」

「空き缶は土の中で分解されるまで何十年もかかる。ビニール袋はウミガメがクラゲと間違えて食べてしまう。」

「うつせえな！昔の話を蒸し返しやがって。自分のことは棚にあげやがってよー。昔のことをネチネチと。まだ俺らがガキのころはそんなに環境に敏感じゃなかったんだよ」

なんで、いちいち昔の話を覚えてんだよ。前髪の分け目がくずれてきてるから目がよく見えん。ただでさえ細い目ののに。かきあげろよなー。うざくないのかよ。でも知らなかった。ウミガメってクラゲ食うんだ。ジーっとして歩き出さないけど。

「もう、わかった、わかったって。お互い様ということで。ただ、ゴミは捨てんなよ」

ふうーどうにか歩き出した。

ちよっと降りになってるから、もう着くのかな。太陽、さつきよ

り傾いてきたな。陽射しはまだまだ全快だけど。草はけっこう茂ってるし、木は高くても向こう側は見えないし、こうやって、あらためて見回すと裏山なんていうほどドラエモンの裏山的軽さはないぞ。よくガキのころは自分らだけで来てたよなあ。学校も親もそんなに行くとか言っただけでなかったし。日が暮れてきてもギリギリまで基地にいたりしたし。さすがに暗くなるまえにはぜったい帰ってたけど。暗くなるのにビビってるの感ずかれないようにしてるつもりなんだけど、そのときはみんなビミョーに速歩きの。誰も一番後ろにならにようにするから、道いっぱい横一列になるんだよな。太田のやつがチョービビリでやたら大声でしゃべるし、間も空けないし。あいつ昼間でも基地に一人でいようとしなかつた。二人で基地にいて、俺が外出て行こうとしたら、ぜったい付いてきてたし。そういえば、一度帰りに後ろから、オーイって声がして誰か走ってくるやつがいて、それとなりのクラスの工藤だったんだけど、太田すげえ勢いでダッシュしてたんだ。この山に最後までいるのって俺らぐらいだったから、後ろから来る人がいたら確かに誰？って感じにはなるけど、あーまで走り去るかね。あのときの太田は速かったな。あの肥満児が、運動会のクラス対抗リレーでは確実に三人抜きされるやつが。あんなに速く走れるのかっていうぐらい速かったもんなあ。デブの底力を給食のとき以外ではじめて見たよ。山降りたところで待ってたけど、俺らを見たとき泣きそーな顔だったし、「先行くなよなあ」って言ったら、「だってさあ、だってさあ」ってついに泣きだしたから、みんなでなくさめたけど、次の日、思いっきりクラス中に言いふらしてネタにしたけど。工藤も自分のクラスで広めたから、あわや学年レベルのネタになるところだったよ。それから、ここに来るたんびに冷やかされたという。太田、確かに関西の大学にいったんだよなあ。中学では同じクラスになってないし、高校は別だったから、遊ぶ機会なくなっちゃったけど。あいつ関西なんか行って大丈夫なのかよ。関西人のパワーについていけないのかね。痩せてよかったよなあ。デブのままだったらまちがいない

ブーちゃん系のあだ名つけられてたな。中学のとき卓球部入ってから急激に痩せたしたよな。ああいうのって毎日見ると気付かないと思ってたけど、中一の夏休み前にはあきらかに入学前とは別人になってから、みんなから、お腹に虫いるんじゃないのって突っこまれてたし。しかし、卓球であんなに痩せるもんなのかよ。サッカーが一番運動量多くて、次がバスケットははずだけど、テニスならまだしも卓球ねえ。

「太田ってさあ、中学入ってから急激に痩せたよな。卓球であんなに痩せるもんなのかよ。アイツここに来るたんびにビビって一人ではぜったい来ようとしなかったんだぜ。一人でしか来なかったお前とは大ちがいだな」

いっしょに行く人がいなかったただけだろうけど。

「太田は確かに痩せた。アイツは根性あるからな」

「根性？ 太田はお前、そういうのから一番遠くにいるやつだぞ。痩せてもビビりはなおんなかったし。よく関西なんかに行く気になったと思うよ」

太田はコイツと時たましゃべってたっけ。

「太田は肝の据わったやつだよ。俺らの世代ではヤツが竹中だろうな」

こっち向いてしゃべろよな

「竹中あ？ アイツも大人しいイメージしかないけどな。いっしょのクラスなったことないからあんまりよく知らねーけど。太田のどこが肝がすわってるっーんだよ。昼間ですらここに来れなかったんだぞ」

「アイツはな、小学校四年の五月に俺をつれて寿司屋に行ったんだぞ。二人で。しかもアイツは次々ネタを注文していったんだよ。平然とな。タダもんじゃないと思ったよ」

「…はっ？ それがどーした。たぶんいつも親とかとよく行ってる店なんだろう。寿司屋に行っただくらいでどーしたっていうんだよ。それのどこがすげえんだよ。なに首かしげてんだ。言いたいことがある

るなら」

ポーン、ポーン、ポポーン、ポポーン

今最後のところ、なんか連続だったんじゃ。どっち側から聞こえてんだ。

「この音つて、ホントなんの音？　どっから聞こえてんの」

足痛え、皮めくれてるところかばいながら歩いてたから、別のところが擦れてきたみたい。おおっ！　なんだ、急に走り出して

「なに急にダッシュしてんだよ。オイ！」

止まった。木を見てるけどどうしたんだろ。でも、すげえダッシュだったな。葉っぱさわったりしてるけど

「なんかあんのー」

のどカラツカラツだから大きい声出すのすらつれえよ。やっぱおかしいな、こんなに木と草びっしり生えてたつけ。なんか昔より茂りっぷりがすごいような気が。草が道のところまできてるし。手入れとかしないのかよ。こことかは、たぶん役所が管理するんじゃないの。緑地土木課にいる鈴木に言っておかねば。そして、発注は田中造園に頼めって言おう。田中の家にはマジで世話になったもんない。アイツん家に遊びに行くたんびにおばさんが手作りのクッキーやらケーキやら出してくれて。甘さ控えめなんだけどうまいんだこれが。店とかで買うやつとはちがつて独特の味なんだよねー。親父さんは夏休みとかバーベキューやってくれたり、海つれてってくれたりしたなあ。兄貴がトラックに鉄板とかテントとか積んで運んでくれたんだ。そのトラックの助手席に乗るのがちよつとしたステータスだったつけ。俺も何回か乗ったけど、ギアチェンジのときマニュアル動かす手つきがムチャクチャカッコよく見えて、俺も子供心にやっぱ男はオートマじゃなくてマニュアルだなんて思ったもん。免許いまだに持ってないけど。兄貴が今継いでんのかな。改革改革で公共事業とかもそんないだろうな。田中と遊んでるときよく街路樹とかに「田中造園」って看板があると、アイツ興奮して「これウチがやってんだよ、ウチが」とか言ってたなー。そんなアイツは役者に

なるっていつて、高校卒業してから会ってねえな。成人式の時も帰ってこなかったし。でも、アイツがそういうジャンルに興味があるなんて誰も知らなかったから、みんなビックリしたよなあ。映画よく見てるのは知ってたけど、まさか高三最初の進路相談のときにそんなことをいきなり言うとは。親も先生も呆れてたみたいだけど。次男のアイツがああ調子だから、ここはなんとしてもこの山の管理を田中ん家に頼めと鈴木にいつておこう。鈴木だって田中ん家にはよく行つてたし。そうだ、アイツはお菓子をよく包んでおみやげにもらつてたんだ。じゃあなあさら、ここで恩返しするのになんの異論もあるまい。ただ市役所はいつて二年目の鈴木にそんな権力はないか。

つて、おいおい

「いきなり、ダッシュすんなよなー。なに見てんの、なんかあんの」視線の先には

「なにこれ、なんの実？」

赤くて粒粒で葡萄をすぐ小さくした感じだけど。

「こんな実がなる木があつたんだ。はじめて見た。ガキのころはこんなの見たことつて、オイ、なに食つてんだよ！なんの実かも知らないのに。やめとけつて！」

いくらお腹空いてて、のども渴いてるからつて。

「なに素で次々つて食つてんだよ。知らねーぞ。なに？ケータイがどうした。なんの写真。あれっ？これつて、この実じゃねーの。今、撮つたのかよ」

「ちがう。それは図鑑から撮つたんだ。この中に保存してある写真のやつなら食べても大丈夫。お前も食つてみるよ」

つて差し出されても。

「マジで、ホントに食えんのかよ。つていうかなんでそんなこと調べてあんだよ。お前、そんな趣味あつたけ」

次々木から取つては食つてるけど。うーんいつてみつかあ。のど渴いてつからさあ、正直水分のあるものだったらなんでもいいつて

思ってたところでこの展開かよ。360度見回しても特に怪しいところは…どうなんだろ？ 口の中で噛んだ瞬間、甘さとともに水分は広がりそうではあるよな。甘いのもういいけど。一口サイズがパクツといかせたくはなるな。よしっ、アイツも次々食ってるし、いつてみつか。死にやあしねえだろ。せーの、おっ、思ったほど甘くはないけど、逆にいいや。プチプチして歯ごたえはいいし、なにより、水っ気があるから、のどが潤う。うん、これならいくらでもいける。

「これいけるよ。渴いたのどにはぴったりだな」

おおっ、すっげえ勢いで食ってるけど、コイツものど渴いてたんじゃん。

「のど渴いてただろ。お前チョコレート食いすぎなんだよ。でも、マジいいタイミングでこの実なってるよな」

こつちのことなんかお構いなしで、両手つかって食ってるよ。けっこうなってるけど、ほとんど奥のほうだな。この緑のやつはダメだろ。あと黄色くなってるやつも。

「赤くないのはさすがにヤバイよな」

ビミョーなのはやめとこ。柿だって緑はダメだし。にしても一口でいけるから止まんねえよ。

手前の方はほとんど取り付くしたな。奥の方まで入ってつとるのはちよっとなー、なんかいるかもしれないし。のどもだいぶ潤ったし、別にもうそこまでして食いたくないからいつか。慣れてきたらあんまうまくないし。

「この実ってここにしかなくてないのかな。お前なんで図鑑なんか写メで撮ってたんだよ。そんな植物とかに興味あったけ。理科好きだったけ？食ってばっかねえで人の話し聞けよ！」

「痛い、痛い、耳引っぱるな、鼓膜が破ける」

「大げさだろ。そんだけで鼓膜が破けるか。耳がちぎれるとかだったらちよっとはわかるけど。この実ってここにしか生えてないのかな。こんなのガキのころは見たことなかったぞ。他にもなんか食え

そうなもんなつてねーかな」

少しは手え休めて食うのやめろよなー。口の周り真っ赤なんだよ。シャツにもついてんじやん。黒だから目立たないけど。シワはダメでそれは気にならないのかよ！

「口の回り、汚ねえな。ついてんぞ」

髪かきわけりやいいのに。暑っ苦しい。

「髪わけろよ！ うざくねえのかよ。っいつか見てるこっちがうざい！」

「いちいちうるさいなあ。俺より髪長いお前が言っなよ。なんだよそのヘアピンは」

「ヘアピンじゃなくて、カチューシャだよ！どこがピンだっつーの。もう行こうぜ。のどだいぶマシになっただろ。これ以上食っても腹の足しにはなんねえよ。それよりも、早く家帰ってまともなメシが食いてえよ」

手前にあるのどんどんとりやがって、持てるだけ持とっつてことか。

「ほら、もう十分だろ。行くぞ」

歩きながらも食う勢い止まんねえよ。そんなうまいか。あー、やっぱ足の別んとも痛くなってきた。いっそサンダル脱ごうかな。いや、もう遅いか。

「わっ、いいよ、俺はもういらないって。お前一人で食えよ」

いきなり人の口のところを持つてくんなよなー。食べる？って一言言えばすむものを。それをそんなにうまそーに食べるお前がわかんねえよ。

ポーン、ポーン

今のは通常バージョンだ。気になんないのかなコイツは無反応だけど。本格的に降りになつてきたな。足にひびく。でも、もう着くだる。その前にケータイとりに行かなきゃな。あるかな。っーか店開いてるかな。夕飯までには着くだろっけど。家帰ったらお母さんになんて言い訳しようかなー。

夕日は沈む、アナタは裸

ヤバイ！ これはマジでヤバイ！ 歩いても歩いても全然着きそうで着かねえなーと思ってたら、降りがだんだん平らになってるなー思ってたら、なんか水の流れる音が聞こえるなーと思ってたら、まあーた河原にでただけど。でも、さっきと同じ場所では…ないみたいだな。んーてことはいつのまにか川と平行に歩いてて、降ったのか登ったのか、どっちなんだろう。えっ、でもなんで。どこで間違うつつーんだよ。一本道だぞ。油断はしてたけど。マジかよ。なんでこーなるわけ。はじめの川のところでミスったのかな。いや、でも川から帰るときはあそこを通って帰るっていうか、そこしか道ないし。…ダメだ。どこでどうなったのか全然見当もつかねえ。だいたい、こんなに時間かかるわけねえんだよ。もう何時間歩いたよ。また来た道戻るか。いや、もう太陽上にないし、空は赤くなってるし。今、戻るとなると、山ん中いるときに日が沈んじゃうよ。それはだけは絶対ヤダ。それに川に戻ったとしても、そこからまたどうやって帰るかが問題だもん。道は確かに一つだったんだから「なあ、どうする？ うおっ」

ダッシュして川の中に！ あれっ、すぐ出てきた。靴と靴下脱ぐわけか、ってシャツもズボンも！
「バカ、トランクスまで脱ぐなよ。なにやってんだこんなときに。状況わかってんのかよ！」 思いきりダイブしたけど、浅いのに石にぶつからなかったのかな。とりあえず、俺もサンダル脱いで足冷やそ、もう限界だよ。あいたたた、砂利の上はなお痛い。こんなに脱ぎ散らかしやがって、シャツのシワ氣にしたのはなんだったんだよ。川の真ん中のところにちようど手ごろな石が、あの石に座って、足だけ水につけよう。あーあ、皮めくれてたとかばいながら歩いてたら、別のところがめくれてるよ。最悪。うゝ水しみるけど気持ちいい。疲れがとれる。水もやっとなめるよ。ふーうめえな。

水分とるのはあの怪しげな実を食べて以来だからなあ。あれではちゃんと水分補給したとはいえんえからな。コイツはできたかもしれないけど。

「オイ、バシャバシャはしゃぐなよ」

元気だなコイツは。ふうー、マジでどうしよう。あと一時間ぐらいかな、日没まで。なんで途中で引き返そうって考えなかったんだろ。そうだ、コイツが前歩いてから道あつてると思つて、いや、でもはじめは俺が前歩いてたよな。それよりも、歩いててもなんか、ビミョーに見たことある風景のような感じがするから。だから、迷つたなんてまったく考えもしないっていうか、うん、今だって、さっきの河原とちがうのはわかるけど、なぐんか来たことがあるような、ないような。うつ伏せになつて動かないけど、なんのつもりだろ。水死体みたいだな。ケツ見せんよなー、色白いなー、ガリガリじゃん。裸になつちやいけない体だろ。なんて自然にマツチしてないんだ。でも植物にはくわしい。なんとか帰る方法ねえかな。無理やり草木の中突っ込んでったら、すぐ道路がありました、なんてオチはないのかよ。って言つても、草木の中通る気はないけど。裏山つて言つても決まつた道しか知らないし。つーか一本道だつたと思つんだけどなあ。あれっ？ まだ起き上がんないよこの人は。

「おい、苦しくないのかよ」

なんだよ。意識あんだろーな。ちよつと、こんな浅いところでまさか

「プハッ。ハアハアハア、ゲホッ、ゲホッ、ハアハア」

「なに、こんなときに限界に挑戦してんだよ！状況わかつてんのか」フルチンでなにやってんだか。

「トランクスぐらい着れば」

あーもうバシャバシャと、落ち着いて上がれよなあ。あーこうしてる間にも日が沈んでいく。もう半分は木に隠れてるし。腹減つたなー。もう何時間まともに食つてねえんだろ。そうだ、チョコレート、ポケットの中にまだ、あつたあつた。あと三つか。とりあえ

ず一個、銀色はアーモンドだったかな。溶けてるから紙にへばりつくんだよな。あーちがった。なんにも入ってないやつだ。ハズレ。次は青。おースナック系だ、サクサクしておいしー。やつぱ歯ごたえないと。あーでも、よけい腹減るよ、中途半端に食ったら。

「チョコレートまだ持つてる？ 俺あと一個あるけど食べる？」

トランクスだけはいて、戻ってくるけど

「トランクス濡れたまま着たのかよ。それだったらスッポンポンでよかつたんじゃ、ってなにすんだ！ バカ、やめろ、うゝ、なに！ でえゝい。ハアハア」

なに？ なに？

「急につかみかかってくんやな！ ケンカ売ってんのか！」

思わず思いきり投げちゃったよ。ああ痛えー、今ふんばったので足が！ チョコレートも落としたし。

「下着濡れた。ずぶ濡れだよ。替えのやつ持っていないんだぞ」

「俺だって替えは持ってねえよ。だいたい、お前が、いきなりかかってくるからだろうが。水の中入ったら急にテンション上げやがって。いきなり裸になるし」

座り込んだまま、うつむいて、ちよつと強く投げすぎたかな。でも、とつさのことだったし。

「いつまで座ってんだ。立てよ」

「だから、トランクス…着ただろ…ちよつと…俺もハメを外しすぎたと思うけど」

なんだ？ もしかして裸になったこと、恥ずかしがってんのかな、今さら。

「なに今になって急に恥ずかしがってんだよ。テメエの裸なんか見たって別になんとも思わないし。それだったらはじめっからフルチンになんか、なるなよなー」

「ウオー」

「だからなんなんだよ！ ばか、やめろって、そんなことしても、テメエになんか、や、め、ろって、いつてるだろーが！」

マジでなにコイツ。裸見られたのがそんなにマズイことだったのかよ。あちゃーまたきれいに投げちゃったな。どつか石にぶつけないかな。大の字になって動かないけど。

「どつか打たなかった？ ほら」

うわあ、差し伸べた手を払われちゃったよ。

「もう上がんの？」

うつむいて歩いてくなよなあ。夕日に照らされる背中が寂しい。

「悪かったよ。ちょっと強くやりすぎたよ。でもお前が急に向かってくるから」

砂利の上で横になっちゃったよ。痛くないのかな。あつ、もう一回起きて、石除け出した。やっぱり痛いんじゃない。でも、体育の授業で柔道やつても引き分けが最高だった俺にあんなにきれいに投げられるとはやっぱりコイツは相当なヒョロ男だ。また横になった。とりあえずそのままにしておこう。さて、どうしたもんだろう。戻るっていうのは…ないな。山中で真っ暗っていうのはさすがに…懐中電灯もないし。あつても嫌だけど。今でもちょっと怖いもん。陽が落ち出してくると急に寂しくなってきた気がする。太田すまん、あんなにネタにしておきながら、今けっこうビビってます。しかも二十三にもなつて。そのままいたほうがいいのかなあ。水もあるし。第一、足痛くてこれ以上歩く気しないし。でも腹減ってるしなあ。

このままじゃもたねえよ。あの変な実がなつてたところまで行つてとつてくるかあ。いや、あそこまでもそこそ距離あつたし、もう山の中はそーとー暗いはずだよ。林の入り口のところももう先は暗くて見えにくいもん。だいたい、あんな実のためにあそこまで行く気がねえ。いくら食べたつて腹は膨れねえだろうし。アイツ、チョコレートもう持ってないかな。甘いもんはそんなに食べたくないけど、よく映画なんかで遭難したときチョコレート少しづつ食べて生き延びたりしてたような。うーん、どつか抜け道みたいなものはないかなー。あつたとしてももう遅いか。ダメだ、腹減ったのと疲れてるのでなーんも思い浮かばん。陽が沈んでいく、空が赤い。もう片

一方はもう暗くなってきた。：もう一泊ここですんの？考えられない！昨日は酔った勢いだから寝れた、っていうかつぶれただけだけど、シラフでどうやってこんなところで寝ろっていうんだよ！っていうか腹減って寝れねえよ。家に帰りた〜い。二日も帰んなかったらさすがに心配するよなあ。しかもケータイはつながないんだから。あー昨日の酒があ。やつぱ若さにまかせて深酒はいけないなー、禁酒しよう、禁酒。コールをかけられたって、もーのらん。あんなの時間と金の無駄だ。って忘年会のときあたりから言ってるよな。アイツはマジで寝ちやったのかな。あんなやつでも一人でいるよりはずっとマシだな。トランクス濡れてるのに寒くないのかな。上もなにも着てないし。陽が落ちてくるとさすがに少しは冷えてくるかも。一応山だし。やれやれ、よっと、アイテッ！油断して皮むけてるところに重心かけてしまった。でも、水に不自由しないのがせめてもの救いだな。おー見事に大の字だな。脱ぎ散らかしたやつを集めて、ほらよ、シャツ一枚かぶせるだけでもちつとはマシだろ。こんなやつなんかになんて優しいんだ、俺は。マジで寝てるみたいだな。起きてるときも目が細いから近づいてみてやつとちゃんと寝てるかどうかわかる。にしてもこの顔の細かい傷はどうしたんだろ。コイツ「覚えてないのか」とか言ってたよな。やつぱ俺が原因なのかな。全然覚えてないけどなあ。ホントに熟睡してるみたいだな、よくこの状況下で。石除けたとはいえ背中痛くないのかな。起きたときが大変なんだよ。腹減ってないのかな。あの変な実とチヨコレートだけでは、いくらこのキン骨マンといえども栄養補給は足りないだろ。はあ、なんか一気に疲れが。そりゃそうだよな。今日いったい何キロ歩いたんだっていう話だよ。腹減ったなー、風呂はいりてえ、っていうよりベッドで寝たいよ。う〜ん。

夢、現実、または初恋の

太田 あ、太田 あ、速えよ、先行きすぎだつて。いつも待つて
てやつてるだろ。鈴木もなんとか言えよ。自分が遅れると走つて追
つかけてくるくせになあ。あれ佐藤は？ 先帰つたんだっけ。太田、
もうあんなここに。本気だして追い抜いてやるうか。うん？ もう
こんなに陽が落ちてきてる、いつのまに。俺、明日の体育攻めたい
から前ね。この前キーパーやつたんだから。点とられなかったんだ
から文句ねえだろ。鈴木、ちよつと急ごーぜ。太田もう見えなくな
つちやつたよ。田中も急げー。あつなに、草のそこなんかゴソゴソ
と。おわあーびっくりしたー。山田かよー。なにやつてんだよお前
びっくりさせやがつて。服にいつぱい草ついてんぞ。これひつつく
んだよなあ。ダメだ、はたいてもはたいてもきりがねえから、家で
洗濯してもらえよ。あれ、もう太陽見えないや。鈴木走ろーぜ、あ
れっ？ 鈴木は？ さっきまで後ろにいたのに。どこいったんだろ
そーいえば田中も。山田、あいつらさっきまでいたよな、なにキョ
ロキョロしてんだよ、なんか探してんの？ おかしいな先行つちや
つたのかなあ、つておい山田、どこに行くんだよ、そこは道じゃね
えだろ。また草の中に入つてくの？ やめとけて、暗くなつてき
たしもう帰ろうぜ。山田、山田、うわー、この野郎、人が止めよ
うとしてるのを突き飛ばしやがつて、なめんなよ。うー行くんじや
ねえ！ あつ、悪い強くやりすぎた。まさか倒れるとは、すまん。
おい、なに急に走り出してんだ。おい待てえ、俺の方が足はかなり
速いはず。ハアハアハア、おかしいな、なんかいまいちスピードが
出ない。うーん、ダメだ。なんで、ああ、どんどん離されてくよ。
ハアハアハア、でも暗くなつてきてるし急がなきゃ。鈴木たち後ろ
じゃないよなあ、振り返るんじやなかった。メチャクチャ怖え。ハ
アハアハア、山田もう見えなくなつちやつたよ。でも、太田にも追
いつかないとは。あのデブに。あいつ入り口のところで待つてなか

つたら許さねえぞ。うわゝホントに真っ暗になってきた。なんか速いよ。あいつら俺を置いていきやがって。明日はぜったいキーパーやんねえ。ハアハアハア、あいつら俺がキーパー好きでやってると思つてんだよ、きつと。俺がやると確かに点は取られないけどさあ。ハアハアハア、にしてもなかなか着かないなあ、こんなに遠かつたけ。早く家帰らないと、またお母さんに怒られる。昨日も遅いつて言われたもんなあ。でも基地にいるとなんかずつと居たくなるんだよなあ。俺らのに基地に比べたら、他のやつらはガキのお遊びだよ。そうだ、これからはみんなでお金出しあつて、基地用のジャンプ買って置くようにしよう。家で読んできると、マンガばかり読んできてお母さんうるさいからなあ。今日のご飯はなにかなあ、カレーだつたらいいなあ。ポテトサラダもあるといいなあ。なんかさつきから足が、いや腰が痛いんだよなあ。だから早く走れないのかな。体が重いゝ。みんなもう降りちゃったのかな、痛えな、ホントに待たせてくれてないのかな。太田のデブめ、鈴木と田中もだよ。山田はどーでもいいとして。でも、アイツは茂みの中から出てきたけど、あんなところでなにやってたんだろ。アイツは変わってるからなあ。基地仲間もいないくせに、ここに毎日一人でなにしに来てんだろ。うーん、しょうがない今度、特別に俺らの基地に入れてやるか。できたらジャンプ持つてこいつて言おう。あれっ、でもアイツあんまりマンガ読んでるイメージないなあ。いつもなんか本を読んでるけど、休み時間の間ずっと。なんの本だろう。ハアハアハア、やつぱ誰にも追いつかないよ。それよりも、まだ着かないのか。もうホントに暗くなってきたよ、後ろ見れねえよ。太田がびびるのもわかるなあ。でも、今はホントに暗いもん。ハアハアハア、腰痛いゝ、うわゝ、なんか着きそうにない感じがしてきた。あっ、前に人が、誰だろう。オーイ、待てよー、一緒に帰ろうぜー。

夜になっちゃったよ

…うん。あれっ？ あー、やっちゃった。寝ちゃったのか。うそ、マジで。わー完全に夜じゃん。うーん、どんくらい寝てたんだろ。あー腰がいてえ。体育座り状態で寝てたから。イテテ、あー体がだるい。けっこう寝たような気もするけど。あれっ？ 火がある。山田がやったのかな。ちゃんと枯れ枝とか積まれて、本格的な焚き火になってる。火はどうやって点けたんだろ。山田はどこ行ったんだ。おいおい一人かよ。置いていくなよなあ。火があるのは在り難いけど。のど渴いたな、水飲み行こう。

イテテテテツ、足は筋肉痛だよ。太ももに力入れると痛い。あんなだけ歩きやあな。最近、あんな運動もしてなかったから。

「起きたのか」

「うわっ、なんだ、暗い中からいきなり声かけんなよなー、びっくりしたー。もう完全に夜だよ、俺どんくらい寝てた？ あの火はお前がやったの？ なんか本格的じゃん。どうやってやったの？ ライターとか持ってたんだ。でも、お前タバコ吸わねえだろ。川の中でなにやってんだ。うんっ？ なに持ってたんだよ」

暗い中で黙ってんじゃねーよ。ちよつと不気味だろーが。焚き火のところに戻ってったよ、また無視か。やめてくれねえかな、こんな状況で。俺はとりあえ水飲んで、あ痛たた、屈むと太ももが痛い。太ももは筋肉痛だわ、足の裏は皮むけるわ、痛いところがあつすぎてどっちに注意をもつてたらいいのか。ふー、昼間よりも水冷たく感じるなあ、やっぱ夜は冷えるのかな。そんなに肌寒くはないけど、こつやつて見ると火があるっていうのはホツとするよなあ。なかったら、もつとテンション下がってただろうな。でも、思ったよりも暗いってわけでもないなあ。まわりを見ても、形はおぼろげながらわかるし。

「お前いつ起きたんだよ、そのビニール袋はなに？ 何が入ってん

の？　ってなんだ。うわっ！　魚じゃん。なんで魚なんかあるんだよ。すげえー、もしかして獲ったの？　なに持ってるかと思えば。こんな、ちゃんとした魚がこの川にいた。どーやって獲ったの？　その竿みたいなやつは…」

「作った。竿は作った」

なんでカタコトなんだよ。

「ああ、木の枝。餌は？　虫でも捕まえたの？　なんだよ、なに指さしてんだよ。俺？　俺の服が、ああっ！　裾のところ、メチャクチャ切られてる！　じゃあ糸の代わりは俺のから」

「ちよつとね」

「ふざけんな！　ちよつとね、じゃねえよ。フツー自分の使わなくねえ。このタンクトップ気にいってんのに」

でも、うまく作るもんだな。

「それで魚が獲れたんだから安いもんだろ。三匹だぞ。こんな粗末な道具で三匹釣るのがどんだけ大変かわかってんのかよ！　のんきにお前が寝てる間、俺はな」

「だからって、もういいよ。っていうかこの魚食えんのかよ」

なんで、逆ギレされなくちゃなんねえんだよ。

「食える。火を通せば食える」

「その加熱処理すれば、すべて良しみたいな考えって」
だいたいはじめに寝だしたのはおめえだろ。

「正直、魚はちよつと専門外ではあるんだよね、まったくってわけじゃないけど、でさ、俺がさばいてる間、お前は枯れ枝を取ってきてよ。ほら、もうストックがないんだよ。魚食わしてやるだから、そんなくらいはやってもらわないと。ほら、働かざるもの食うべからずってね」

ほらって、ぜんぜんうまくねえよ。

「枯れ枝？　どこに？」

「山の中入っていけばすぐだよ。たくさん落ちてる」

「ええっ！　マジで」

それだけはマジ勘弁。

「マジだよ。入ってすぐのところでもいいから。お前小学生のころは太田をあんなにバカにしておいて。自分は、今いくつだと思ってんだ」

「わかったよ、行けばいいんでしょ、行けば」

「ったくやつとしやべりだしたと思ったら、態度でけえな。しかも昔のことをよく覚えてやがんな。」

森の中は…

「あゝイテテ、俺、足の皮むけてるうえに太もも筋肉痛なんだよ」
うーん、予想通り無視か。だんだんわかつてきたぞ。はあー、やつぱり行かなきゃなんないんだろうな。魚食いたいし、コイツは一応火も点けたし。俺は大自然の中で、大ではないか。なぐんも能力なしだしな。

「オオ！ それは万能ナイフ。そんなもの持ち歩いてるのか。こんなに機能いっぱいあってどうすんだって昔は思ってたけど、いざこんなときになると、とても便利だよな。それで魚さば」

「あゝもう、火、消えちゃうよ、苦勞して点けたのに。早く取りに行ってくれ」

なんだよ。火を点けたぐらいで。偉そーに。サンダルはつと、あったあつた。そつと履かないと、いてて、あんまり歩きたくないのに。足の裏も気になるわ、太ももに力いれても痛むわ、俺のこの歩き方見ても行つてこいつていうかね。振りかえつて見ても、案の定まったく見てない。だよな。つーかこっから見ても奥はメツチャ暗いよ。近づいてみてどんだけ、河原のところか、火があるからかもしれないけど、明るいかわかるよ。にしても、なんで俺があんなヤツにパシられなきゃなんねえんだ。なにが働かざるもの食うべからずだ、てめえだつて文化祭のときなんの戦力にもならなかつたくせに、出し物の焼きソバ二つも食つて女子からヒンシュクかつたくせに」。

うわー、この中に入つてくのかよ。一步も入りたくねえ。この入り口のところに落ちてるやつでいいじゃん。うんっ、これ拾つて持つてこよう。あいたた、屈むたんびに太ももが。

「オーイ、そこのはダメだよ。湿気含んでるかもしれないし。だいたい、大きすぎる。もうちょっと中入つて、木の下に落ちてるやつを取つてこーい。夜中絶やさないようにするんだから、いいぐらい

のやつを。とりあえず持てるだけもってこいよー」

なんて勝手なことを。こっちの気もしらないで。のヤロ、こういうときはしっかり見てやがんな。ちよつとは中入んないと。

怖ええ。ホントに暗いよ。中と外で別世界だよ。なんでもいいから早く拾って帰ろー。おつ、けっこう落ちてるな、とりあえず、もう取りに来ないでいいように、こんな感じのをたくさん…すぐ集まりそうだな。うわぁ、こいうときって枝とか葉っぱがさあ、なんかの形に見えたりすんだよねえ。茂みからはなんか出てきそうだし。それりもちよつと先がホントに真っ暗でなんにも見えない。太田が後ろを気にしてたの今だったらわかるよ。俺の場合は前だけど。もう、足の痛みなんか気にしてられん。さっさと、取れるだけとって戻ろつ。

さかな、さかな、さかな

やっぱ河原は全然明るいよ。中入ったあとだから、なおさらそう感じる。枝もつと取ってくればよかったかなあ。ちよつとビビリすぎた。でも、さっきまで居た場所を見てみれば…二度と行く気がせん。まっいつか。足りなかったら今度はアイツを行かそう。

「取ってきたぞー、中、真っ暗だよ。なんにも見えないんだから。俺は痛い足を引きずりながら…おーすげえ、ちゃんと三枚におろして、あれっ、フツーさあこういうときって、そのまま串に刺して焼いたりするんじゃないの？ 切り身にしてどーすんの？ あ、今枝を削って串を作ってるわけね。でも、これに串刺したら、あれ、ほら、ウナギ焼くみたいにならない。よくテレビとかではさあ、一本丸ごと刺して、それをガブツと」

「うるさい。こうやって切り身にしたほうが火がよく通るはずなんだよ。だから、魚は専門外だって言っただろ。それはともかく、たったこんだけしか取ってこなかったのかよ。こんだけじゃ足んないよ」

「えー、十分でしょー。魚焼くのに。だいたい、あれ以上中には行けねえよ」

「あのなあ、夜中火は絶やさないようにって言っただろ。もつと奥まで行けばいいぐらいのやつがたくさん落ちてるのに。お前は入り口付近でウロチョロ」

「あーうつせえなあ。だったら、お前が取りいけよ。俺は足の皮めくれて、太もも筋肉痛なのに」

「なんだよコイツ、魚を取ったぐらいで強気になりやがって。火もおこしたけど。ため息ついてんじゃないよ。なんでもいからさつさと焼けよなー。こっちはもう何時間食ってないと思っただ。そうそう、串を通していつて、おおっ、今まで気付かなかったけど、満月だ。でけえな、っていうか近えな。星もすごい！ こんなにきれ

いに見えるそこだったんだ。知らなかった。そんなにここは標高高くないはずなのに。こんな絶景スポットだったとは。みんな知ってるのかな？ 知るわけねーか。夜までここにいることはなかったし。月なんて最近こんなにちゃんと見たことなかったなあ。幼稚園ぐらいのころはよく見てたような気が。あっそうか、あのときはウサギがいるかどうかっていうので、俺はどっち派だったんだっけ？ あーそうだ、確かイナイ派の急先鋒だったのに、イル派に寝返ったんだ。それは、単に大好きなサユリちゃんが、「イル」と言ったのがきっかけだったんだ。これをみんなに感づかれないように、イル派に鞍替えすんのは大変だったなあ。わざわざ、昨日、家のベランダから見てたらなんか影が見えた、とか、なんか月に行った宇宙飛行士がどうのこうのとか、幼稚園児にしてはやたら凝った嘘をついてまで、イル派に寝返ったような気が。おかげで田中、鈴木とはちよつと険悪になったよ。あんなガキのときに、すでに男友達より女を優先してるとは。俺は男子の風上にもおけないやつだな。それでも別にサユリちゃんと仲良くなったわけじゃないけど、まっ幼稚園だしな。

「お前はイル派だったけ、イナイ派だったけ？」

「はあ？ 分けわかんないこと言ってるんで、自分のは自分で持てよ」

「えっ、ああ、魚ね」

「ほら、こうやって、二本、両手でしっかり持って、そう。マメに引っくり返せよ」

「ホントウナギ焼く人みたい。こんな風に魚焼くのはじめてだよ」
家でも魚なんて料理したことないけど。うー、いざ魚を見るとまた空腹感が。よし、早く焼けるー。生の魚でこんなに空腹感を刺激されるとは。焼けるー。アチツ、火に近づけすぎた。焦っちゃいけない焦っちゃ。じっくりと中まで火が通るように焼かないと。っ、わかってるけど見てるだけで口の中唾だらけだよ。にしても、こいつにこんなアウトドアな一面があるとは。外見からは想像もつ

かん。でも、秘密基地もないくせに毎日来てたぐらいだから、あのときからこういう遊びをしてたのかな。一人で。

「お前が火おこせてマジ助かったよ。じゃなかったら、真っ暗な中で一晩過ごさなきゃならなかったし、魚も焼けなかったし」

「あのな。火がなくても今日だったらそこそこ明るいよ。見ろ、今宵は満月。月明かりはなお前が思ってるよりも、ずっと明るく大地を照らし出す。感謝するなら月と天気にしろ」

「あつ、そう」

しゃべりだしたらっていうか、夜になってからか、態度がでかくなってるよ。なにが、今宵は、だ。なんのセリフだよ。確かに、やけに明るいなあとは思ってたけど月のせいなのか。へえーまあすごい満月ではあるけど。

「焦げるぞ。もっとコマ目に動かさないと」

「あつ、そうだ、そうだ。つい話しに気をとられて」

コイツは言うだけあってコマ目に引っくり返したり。火から近づけたり遠ざけたり、体まで揺れてるよ。職人の手つきだよ。そういえば、この魚なんの魚だろう。この川に食えるやつがいるっていう話は聞いたことないけど、そもそも釣りに行く人からして見たことないんだけど。鮎？ なわけないか。こんなとこにいるわけないもん。ブラックバスはそもそも食えんのか。ブルーギル、ニジマス、うーん、どれも形がちがう気がする。っていつても釣りゲームでしか見たことないけど。だいたい川魚なんてそんな知らないし。

魚、夢、現実、魚

「お前なかなか筋いいよ」

「うん？ あつ、ああ、あいがとぎいます！」

筋いいって、お前べつにその道のプロでもなんでもないだろ。でも、俺って筋いいのかな。なんかやってるうちに楽しくなってきたし、けっこう、この串さばきが。ウチワとかあったらパタパタもするのに。でも、いいかもな焼き鳥屋とか、らっしやい、とかいったりして、常連さんと話ししながら、軟骨とネギマお待ちとかつて。

俺、赤ちようちん系の居酒屋好きだし、帰りがけのサラリーマン相手に会社の愚痴聞いたりして。そうだ、コイツに厨房をまかせよう。それで、俺はオーナーで店舗の拡大のために、日々戦略を……いや、ダメだ。コイツはホントにしゃべれないから、客相手に返事もしないかもしない。頑固オヤジのいるラーメン屋レベルじゃないからな。となると山田板前案は却下ということ。って俺だってなんの変哲もない一学生にすぎないじゃん。夏季レポートも一枚も仕上げてない、単位取得もままならない。それが、なんで居酒屋の全国展開を考えてんだ。なんの知識もノウハウもないのに。あゝ来年の今ごろは就職活動真っ最中、ていうか決めてないとヤバイよ。説明会にすら行く気も起きねえけど。来年は採用人数アップするっていう話しだけど、どーなんだろ？ ニュースなんかではバブルのときよりも超売り手市場とか言ってるけど、周り見ても言うほど浮かれてねえぞ。まあ、あのときの学生が浮かれてたのかどうかはテレビでの印象だけだけど。

「ほらあ、また手止まってる」

「あ、ああオツケー」

まあ、先輩でも内定取った人はやっぱりしっかりしてる人たちだからなあ。あんま、採用人数とかは関係ないかもな。ただ勝田さんに関してはなんで？ って感じだけど。あんないい加減な人が。飲み

会で幹事をやれば店の予約してなかったおかげで、みんなで入れる店を探して一時間近くも繁華街をグルグル…そうそう入れるわけねえじゃん！二十人はいるのに。まして週末に。とはいえ、やっとで入れた店はけっこういいとこだったから、その後も使ってるけど、「おかげでこんないい店発見できたし、話しのネタはできたし。結果的にはいいことづくめだな」

ってあんたが言うなよあんたが。キャンプをするからGWは空けとけて言っておきながら、自分は海外行ってるんだもん。だいたい、一週間前ぐらいになってもまだ、どこにする？なんて言ってる時点で、こりゃ流れるかなーってば、みんなも思ってたとは思いうけど。まさか海外に行ってるとは！しかも、帰ってきてから聞いたら、行くのが決まったのは出発の三日前だって言ってたけど、もう、こっちの方はあきらめてた、というか意識もなかったってことかよ。確かに先輩たちもアイツの言うことはあんまり本気で受けとんなってば言ってたけどさあ。でも悪い人じゃないんだよねえ。あれで。話しやすいというか、聴き上手というか。全然先輩風もふかさないし。あの人当たりのよさは実社会でこそ生かされるのかも。でも、経理に配属されると思うって言ってたけど。経理！あのいい加減さで。確かに、簿記もってるし数字見るのは苦じゃないって言ってたけど。見るの苦じゃなくても細かいチェックとかできんのかよ。採用する人もどこ見て経理に配属させようと思ったんだろ。まだ営業とかの方が向いてるんじゃないやあ。おつ、そろそろいいんじゃないの。表面、ちょっと焦げ目ついてるけど、まっ、そんなくらいのほうがカリッとしておいしいしな。

「もう、食うぞ、お先に」

熱っ、あつ、あー中はきれいに焼けてない。グニヤッしてる。中まで火通ってないよ。ぺっ、気持ちわる、外はカリッと中はグニヤッって変な歯ごたえだ」

もうちょっと火であぶろう。カツオのタタキは好きだけどそんな感じでもなかったし。でも食べそうな感じではあったな、ちゃんと

まんべんなく火が通れば。

「ホントだったら炭火焼きしたいんだけどな、もうちょっと火から離して焦らずじっくりと。そして、コマめに動かすんだ。お前少し経ったらもう手が止まってるぞ」

火から離して、マメに動かす、と。あー時間かかりそー。中途半端に一口食べたから逆にガマンできないよ。多少生でまずくても味なくてもこんだけなんも食ってないとかくなんでも口に入れたくなるもんだな。

「枝足すよ」

こんだけとってきたんだからぜったい足りるって。寝たあとは消えたっていいじゃん。あつ、でも朝になる前にまちがって起きたらちよつと怖いかも。にしたって、明け方まではもつって。5時ぐらいまであればいいとして、あと何時間だ。今は、あつそっか、ケータイないんだった。今ごろ俺のケータイは着信ありが何件入ってる。はあ、一気にへこむ。火もつと燃えろ、燃えろ、早く焼ける、焼ける。

エッ？ お前何様

夏休みにこんな、アウトドア的なことやるのって何年ぶりだろ。星空の下で、火をおこして取ったばかりの魚を焼く。いいな、って言いたいところだけど、やろうと思ってるんじゃねえからな。山道を何キロも歩いて歩いて、道に迷って、のど渴いたら変な実食って。そういえば、あのポーンポーンっていうの、夜は聞こえてこないなあ。夜は鳴らないのか。なんの音かはわからずじまいなんだけど。まあ、さすがに夜は苦情がきそうだもんな。でもホントになんの音なんだろう。なんでコイツは気にならないんだよ。

「あの昼間のさあ、ポーン、っていう音ってなんだったんだろ。ガキのころは鳴ってなかったよな。お前気にならないの。魚焼けてる？」

「全部かはわかんないけど、今食べたところは中まで焼けてた」

「マジで。じゃあ俺のも、もういいよな」

表面はけっこう焦げちゃってるけど。

「そうだな。心して食えよ」

心して食いますよ

「あつちいー、うん、中まで火いとおってるよ。うめえ、あちちつ、熱いけど冷めるの待ってらんねえよ。あゝ、胃になんか入ってく感覚何時間ぶりだよ、お前もすっげえ腹減ってただろ、いくらなんでもチヨコレートとあの実だけじゃあな」

おいしいけど、やっぱり味がなあ。醤油かけてえって感じだけど、それはな、贅沢ってもんだよな、でも、やっぱりもう一つなんか欲しいっていうか。塩でもいいんだけどなあ。

「うん、なかなかだな。前に食べたのよりも脂がのっててうまい」
「前？ 前って何回か魚とったことあんの？ 食える魚いるなんて、骨が、ペツ、知らなかったし。っていうか川ではあんま遊ばなかったよな。ガキン頃からとってんの？ うまいけど醤油欲しいくな

「い？ 塩でもいいよ。ペツ骨が。」

「塩？ 塩だったら、ひよつとしたら、ちよつと待って、ほら」

「えっ、このビニール袋のなかのやつ塩なの。…なんでこんなもん持ってたよ。塩なんてフツー持ち歩かねーだろ」

ホントに塩？ ちよつと舐めてみて

「あっ、塩だ、塩だ。じゃっ、ちよつともらうぜ」

塩まで持ち歩いてるとは。万能ナイフまで持ってるし。チョコレートといいポケットの中によくあんだだけ色んなものを。四次元だよ、四次元。まだなんか入ってんじゃないの？ そういえばトランクスそこで乾かしてんのに、ズボンはいってるってことは、下着てねえのかよ。スースーして気になるだろ、それだと。どうせなら、乾くまでなんもはかなきやいいのに。いや、そしたらこっちが気になるか。うん！ ウマイ。塩かけるだけで全然ちがうよ。すっげえうまくなるよ。塩だけっていうのが逆にいいのかも。素材の持ち味を十分に引き出してるってなにいったんだ俺は。いや、でもマジでうまくなるよ。お前もかけてみろって」

「いや、俺はそのままでもいい。魚の本来の味を楽しみたい。こんだけ脂のつてるのはなかなかないからな。うん、口に広がるジューシーな旨味。かといってしつこくない脂。舌にとろける食感。これはかなりのものだな」

「ハハハッ、なに俺のいったことに便乗してんだよ。食いしん坊かお前は。でも、確かにウマイよ。腹減ってるからかもしれないけど。いや、それ差し引いてもウマイ気がする。川魚がうまいのかな。海のしか食べたことないし。鮭は川か。でも海に行ってるときもあるから。あっ、ウナギがあったな。でもあれはちよつと別枠だよ」

ウナギは魚っていつてもな。ちよつとちがうし。見た目も、食べた感じも。でも、これはなんの魚なんだ。素で食ってるけど大丈夫かな。食えなくはないか。こんなにウマイんだし。ただ、サバの味とあんまり変わらないような気がすんだけど

「これって、なんて魚？ 鮎とかではないよね」

一心不乱に食ってるよ。お前もそーとー腹減ってたんじゃない。

「気にするな。取った。焼いた。食った。ウマイ。それ以上なにがある。ペッ」

「あつ、バカ、骨わざわざこつち向いてはくなくよ。なに大自然に生きるみたいなこと言ってるんだ。魚の名前聞いているだけだろーが」

自分だって知らねーんじゃない。そういえば、さっき魚は専門外とか言ってたし。じゃあ、なにが専門なんだよって話しただけ。

「もう一つもらうぞ」

いちいち串さして、また焼かなきゃなんないのがなあ。めんどい。

「別に切り身にする必要はない。一匹刺したまま立てとけばいいんじゃない。そしたら、すぐ食えくない？」

「うーん、ムラができるような」

「そんな大きくないから大丈夫だって。やっぱさあテレビとかで見る川魚は一匹丸ごと焼いてるよ、思い出したけど。焼けるまで待ってるあいだもウザイし」

「だいたい手で持ってコマめに動かしすぎるからちゃんと火がとおってないんじゃないのか？」

「でも、手で持って動かすほうが…それっぽいし」

「それっぽいってなんだよ。べつにその道極めようなんて思ってるないし。早く食えるにこしたことねえだろーが。全部刺して立てるぞ」

それっぽいって、お前のサジ加減じゃねえか。俺もなに言われるがままにしてたんだろ。ちよつと、夜になってから主導権にぎられっぱなしだったな。確かに火を点けたのと、魚とってきたっていう実績はな、認めるけどさ。とりあえず、串はコイツがたくさん作ってあるから刺していつて

「骨こつち向いてはくなくば、たくつ」

ちよつと言い負かされるとすぐ反撃しようとするからな。小せえ男だ。

「これ刺してつてよ」

ってやるわけねえか。ホント気分屋だよなー、急にテンション上がった、黙り込んだり。

「バカッ！ 生はやめとけて！ それはちょっとヤバイから。わかった、わかったよ。お前の分は好きにしろ。俺は手えださねえから、な。そうそう、吐き出せ、吐き出せ。こっち向くなってば」

生でいくか。こういうときは行動で抗議しようとするからな。一言、俺のは置いといてくれて言えばすむものを。それに早く焼かないと痛むと思うんだよね。立ち上がって、水飲みにか。だろーな、まずかっただろーしな。でも、アイツよく枝をあんなナイフできれーに串にするよな。手先器用なイメージなかったけどな。

夏の思い出

「ガラガラ」

ハハッうがいまでしてるよ。

「ガラガラ」

一匹通すのは難しいな。

「ガラガラ」

頭からかな、尻尾からかな。

「ガラガラ」

なんで切り身なんかにしたんだろ。

「ガラガラ」

単に包丁さばき、あつ、ナイフか。見せたかっただけなんじゃ。

「ガラガラ」

手が魚くせえ。洗ってこよう。

「ガラガラ」

「うるせえよ！ いつまでやってんだ！」

「ガハッ！ ガハッ！ なにすんだ！ 生でいったから、口の中に寄生虫でも入らなかったか、心配だから」

「だったら、生でいくなよ。あの立ってる二本は俺のだから。お前のはそのまま置いてある」

思いきつり器官に入ったか。

「戻るんだったら、魚見てて」

まっ、大丈夫だとは思っけど。水冷てえ、昼間より冷たく感じるよ。陽が落ちてるからそう感じてるだけかな。いや、ちょっとだけ肌寒い、寒いつてほどではないか。でも夜はやっぱ温度下がるんだな。山だけあつて。焼けるまでしばらくかかるだろうから、あの石のところで座つてよう。

こうやって足だけつけてると、疲れがとれてくよ。アイツはコマめに串動かしてるみたいだな。刺したままほっときゃいいのに。に

しても、やっぱすげえ月だよなあ。こんな近いもんかよ。星もいくつあるんだって話だよ。星座とかに詳しくかったら、あれとあれが繋がってオリオンとか白鳥とかわかんたろうな。アイツは星座には詳しくないのかな。林の中はマジで暗いよ。よくさつき入ってたよなあ。月で明るいとはいえ、火がなかったらここにいられなかったな。火だけがやたら存在感あるよ。

火かあ。小学生のときのキャンプファイヤーはすごかったよなあ。あれなんで行ったんだっけ？ 学校ではなかったと思うんだけど。あー町内会のやつだ。夏休みのイベント。あれにミキちゃんが参加するとは想像もなかったなあ。町内全然ちがうし。あとから聞いたら別の町内のやつでも参加してよかったって話しただけ。まさかねえ、運命的なものを感じたもん。ガキながらに。しかもうまい具合に俺のとなりだったんだよなあ。つーか今にして思えば確信犯的にそこに寄ってたのかな。たくさん話した気もするんだけど、内容が全然思いだせん。そーとー舞い上がってたんだろうな。なんせ学校ではほとんどしゃべったことなかったし。本ばっか読んでるイメージがあつたなあ、暗いつてわけじゃなかったけど。そうだ、マサミの野郎が二人の話にいちいち入ってきやがって。なんで女って、カワイイ子の周りに普通よりやや下ぐらいの取り巻きがいるんだよ。しかも、なぜだか俺はあの女と夏休みの宿題について話したのは覚えてるぞ。なんでそんなどーでもいいことを保存してんだ俺の頭はそれでも、学校よりは邪魔がいらないからいっぱい話したような。あつ、そうか、二人が本の話をしだしてからは入っていけないかったんだ。俺はあの頃はまったく本読まなかったから。ジャンプとコロコロに心奪われてたもん。ジャンプには今もだけど。でも、火の明かりに照らされて笑ってる顔はムチャクチャ可愛かったよなあ。本気で結婚しようと思ったもん、ガキながらに。でも、まさか、まさか、五年に上がるときに転校するとは。しかもわかったのが始業式終わってのクラス発表のとき。自分の名前より先にミキちゃんの名前探してたもんな。そしたら、マサミが「ミキさあ、親の仕事の関

係で急に転校しちゃったんだよ。春休みに決まったからアタシ見送
りにも行けなかった。電話でだけ」ってオノレのことはどうでもい
いんじゃない。ああ、なんでこんなことに！ せっかくあのキャンプ
ファイヤー以来少しは学校でもしゃべるようになったのに。マサミ
のやつもなんの前触れもなく言うんだもん。親の仕事の都合で
好きな子が転校なんて実際にあるんだ、って今になってみると思っ
たよ。あれからミキちゃんはどうしてんだろ。すっげえ可愛くっ
ていうか、キレイなおねえ系かな。あのときからすでに落ち着いて大
人ぽかったし。うーん、もてるんだろうなあ。あー彼はどいつだ。
考えるだけで腹が立つ。でも、ここはひとつ大人になって素敵な人
と幸せになることを願いつつ、いや待てよ。もし、すっげえ遊び人
になってたらどうしょ。夜な夜な遊びに出て、ナンパされては付い
ていき、男を次から次へとつかえひつかえ、二股三股もお構いなし
だったら。…やめよう。なに思い出を自分で汚してっただ。あー
あ、なんとか夏終わるまえに女ゲットしねえとな。あの花火大会で
のケイスケとのナンパはうまくいったんだけどな。アイツ途中でつ
ぶれたから結局別行動にならなかったよ。電話番号聞けなかったの
は痛いな。まさか、終電で帰るとは。急に走りだしやがって。もう
夏は残り少ない、急がねば。

流れ星と骨

手上げてる。焼けたみたいだから戻るか。よっと、いてっ、また皮むけてるの忘れてた。

「おおっ、焼けてる、焼けてる。少なくとも表面は。んっ、なんだよ、お前も切らないでそのまま刺してんじゃん。たくっ、素直じゃないんだから」

なーんだよこのパクリ野郎。でもあんまり言い過ぎるとまた、スネるからやめとこ。なんにしても、やつぱこの方がおいしそうだし、キャンプって感じるよ。ではでは、一口

「んっ、中まで火とおってるよ。うんうん、全部とおってるみたい」これだよこれ。塩もかけて

「うめえ、やつぱ川魚はこうでなきゃ。なにより食いごたえがあるよ」

「そんなに…うまいのか」

「おおっ、切り身のときよりもかなり。いや、別に切り身がまずかったってわけじゃないんだぜ、気分だよ気分」

危ない危ない。ついつつかり。

「すまん。俺のせいで。なんも知らないくせに、調子にのっちゃって」

「いや、気にすんなよ。だいたいお前がとってきた魚だし、火もお前がやったんだし。俺はそれのおこぼれを頂いてるだけなんだから」なに急にネガティブになっただよ。

「お前のはまだ焼けてねえだろ？俺の一本食えよ。いいって、もともとお前がとってきたのだし。食えよ」

なんだよ魚じつと見つめて。

「やつぱ俺じゃダメだな。リーダーはお前がやるべきだよ。俺は知識はあるけど、それも付け焼き刃だし。一瞬の判断力や局面局面での冷静さ、なにより人心掌握術。すべてにおいてお前のほうが指揮

官としての資質に優ってるよ」

「リーダー？ 二人しかいねえのにリーダーもなにもあったもんじやねえよ。オイオイ。なに急にブルー入ってんだよ。いや、お前のサバイバル能力にびっくりしてんだぜ。俺は。食べれる実を調べてあったこととか、チョコレートを持ってたこととか。ほら、なによりの魚だよ。あの程度の装備でこんだけ取ったんだからすげえつて。お前はこそリーダーに相応しいよ。よっ、リーダー！」

アホらしい。

「いやっ、…うん。まあ、これからはお互いの意見を尊重しながら行動をしていこう。たのんだぞ！」

「ういっす！ わかりました、リーダー！」

もう立ち直った。もうちょっと落ち込ませとくんだったな。人心掌握とか言ってたけど、それができてたら苦労してないって。おーすっげー勢いで食いだしたよ。ほーらこっちの方がウマイだろ。

にしても星すげえな。ホントなんでこれに今の今まで気付かなかったんだろー

「あつ流れ星！ おーすげえ。はじめて見た。生で。うわっ、やっべー、チョーかんどー。なに見れんだ。こんなとこで。あー、願い事間に合わねえって。一瞬だもん」

「はじめて…はじめて見たのか流れ星。あんなもん多くはないけど、そこそこ流れてくもんだぞ。お前はいつたい今までなにを見てきたんだ」

「えー、そうかあ。なんか南の島とかで見るとイメージじゃん。流れ星って」

「そんなことないって。ここでもけっこう見えるよ。ずっと見てたら落ちてくるって」

「へっ」

そんなに見えんのか。しばらく上見てよっと。そうだ、次るときのために願事考えとかないと。こういうのってあんま欲深いのはダメだからな、控えめに控えめに。就活うまくいきますようにって

いうのは……いやこの御時世になんにもやってない俺がちょっと虫が良すぎるよな。彼女できますように……いや、それは自分の力で手に入れるもんだ。神頼みするもんじゃあない。うーん、卒業ぐらいにしとか。内定とつたけど卒業できませんでしたっていうのが一番最悪なパターンだからな。

「お前はなににする？」

「ふあにが？」

魚食わえたまま話すなよ

「願い事だよ願い事」

「はからんなんの？ シ」

「流れ星だよ。また落ちてくんذار？」

「シ、そんな習慣、シないしな、シ、別に願い事自体ないし、シ」

「骨はさまつたの？ 汚ねえな、早く取れよ。習慣ないって、ガキるとき七夕とかやったじゃん。短冊に願い事書いてさあ、竹に吊るしただろ」

俺なに書いたんだっけ。

「シ、あれは星じゃなくて、シ、あつ取れた。あの二人が久々に会うから、まあせいぜい幸せのお裾分けてところだろ。俺、あれにも願い事書いたことないし。どうぞ末永くお幸せに、っては書いたことあるけど」

また骨吐きやがって

「こつち飛ばすなよ。汚ねえな。あの二人って友達みたいに言うな。しかもなんて嫌味ったらしいこと書くんだ、ガキの分際で。おめえみたいな不信心なやつは罰があたるぞ」

「そんなことぐらいで罰あたるなんて、心の狭いカップルだ。だから、あいつらこそ罰があたって一年に一回しか会えなくなるんだよ」
「もういいよ」

言うだけ腹立ってくる。なんでこんなに素直じゃない子に育っちゃったんだろ。よくこんなやつと二晩もいっしょにいるよな、我な

がら関心するよ。コイツに話しふるぐらいなら流れ星落ちないか見てた方がいいや。あっ、ちょっと今食べたところ生っぽかった。

そもそもなんでここに？

ふうー食った食った。こんなに魚だけ食ったのはじめてだよ。途中からもう飽きてたし。やっぱサバにしか思えないんだけどな。とりあえず腹は膨れたし、一息ついたな。ちよつと横になりたいけど石が。少しでも除けよう。コイツはちゃんと除けないで横になってるけど、痛くないのかな。あゝ気持ち悪い。そりゃ、ほとんど一日なんにも食ってないのにあんだけ魚食えばな。しかも塩だけで。とりあえず、背中から上のとこだけ除ければいいか。痛つ、石まだ残ってた。んしょつ、はあ、なんかやつと落ち着いたって感じたよ。

今日一日長かったなあ。朝起きたらいきなり河原で、暑いなか山道を日本語がイマイチの人と何時間も歩いて、ケータイないから時間はわかんねえし、腹減るわ、のど渴くわ、そしたら、変な実食うわで。足の皮はめくれるし。そんでまた河原。なんなんだ今日一日は。つていうか明日はどうすんだろ。もちろん帰るけど、今日あんだけ歩いて着かなかったのに、とりあえずまた最初の河原まで戻んのかな。えゝそれだけでもどんだけ歩くんだったって話だよ。俺の足はもう限界だよ。裸足で歩くかー、いやあ、それはムリだろー、かといつてサンダルはもう。ああ考えるだけでマジへこむよ。ケータイの電波が入ればなあ、コイツのケータイですぐ誰か呼ぶのに。あーあなんでこんなことになっちゃったんだろ。昨日の夜：ダメだよつばコイツと逢った後はなんも思いだせん。あつ、そーいえば結局なんでここに来ることになったのか聞いてねーじゃん。いろんなことありすぎて一番肝心なことを「なあ、誰がここに来ようって言出したんだよ。俺？でも俺そんなこと考え付かないと思うんだけどなあ、オイ、寝たの？山田」

なんだよもう寝やがったのかよ。ホントよくソッコーで寝れるよなこんなとこで。まっいいや、今さらそれ知ったからってどーなるわけでもないし、明日聞こう。

「ふぁー、あぁ」

俺も眠くなってきたな、夕方けっこう寝た気もすんだけどな。起きたら足筋肉痛になってるぐらいなんだから。ケータイがないから何時間寝たかもわかんねえよ。でも、別にすることもないし、寝るしかないよな。

星がきれいだな。あの三つ並んでんのがオリオン座かな、あれっ、でもあっちも三つ並んでる。あれも三つといえば三つかな。全然わかんねえや。すっげえなあ、この星見れたのだけはよかったけど、あつ、落ちたよ。あゝなんだよ不意について落ちてきやがって。また願い事間に合わなかったし。いつ落ちてきてもいいように油断しないように、オッ、なんだよ連続でくるか。全然パターンなしだな。でも、さすがにもうしばらくはこないだろ。来そうな気配がしたら、もうその時点で願つとこう。卒業できますようにって。家は心配してんだろうなあ。さすがに二日続けてはなー。お母さんご飯作って待ってただらうなあ。今日のおかずは、なんだったんだろ。ホントだったらカレー食べてるはずだったのに。帰ったらとーぶん魚はいいって言つとかなないと。でもフライだったらいいかな。さつさとレポートにとりかかんねえとな、なにからやるうか。政治学？ いや、あれはちよつと学校の図書館に行かないと、現代経済学はいけそうだな、誰か一人経済学者を選んでどうたらこうたらだったっけ？ あの手先生は出したらとりあえず単位はくれるって話しだから、大丈夫だろ。あと歴史学もなんとかなりそうだし、そうだ、音楽史があつた。他学部科目でとったんだ。クラシックずっと聴いてるだけでもいいっていう情報を入手したからとったけど当たりだったな。ほんとんど寝てるけど。クラシック聴きながら寝れる授業があるとは。先生は異様なテンションで語ってるけど、やっぱり芸術系の人はみんなそうなのかな。課題はシューベルトの未成交響曲を聴いての感想だったけ。「未完成」っていうのもすげえタイトルだよな。未完成は世に出しちゃダメだろうって感じもするけど。それで、あとは、あぁ、ねむ、哲学か。あれの課題は…えゝと…なんかの本

読んでの…感想だった…いや、それは現代思想…だったよう…な…

永劫回帰

おっかしいな、まだ着かねえよ。のど渴いたな、川はすぎちゃったし。あつ、山田あ、どこ行ってたんだよ。先行ったんじゃないかったのかよ。なんでいつつも横の茂みから出てくんの？あれっ、ミキちゃんも、なんでこんなところに。ここなんかに来るんだ。なんで山田なんかといっしょにいんだ？ あいてっ、なんだマサミもいたのかよ。お前背中強く叩きすぎだよ。女がなんでここにいんだよ。じやあ、みんなで帰ろうぜ。暗くなってきたし……

んっ、なんだどこにだよコイツは。こんな時間に。背中んとこ痛え。火が小つちやくなってるな。まつ別にいいか。なんだ、シヨン便かよ。なにわざわざ川でやってんだよ。ったく……

あれってさあ、鈴木と田中じゃない？ おゝい鈴木い田中あ、なに先行ってんだよ。もう帰ったかと思ったよ。アッ、なに、それ今週号のジャンプ？ もう入ってたんだ。バカ、ドラゴンボールの話しすんなよ。俺まだ読んでないんだから。えっ、ちがうよ。さつき会ったんだよ。大丈夫だって、基地はマサミ達には教えてないから誰が女なんか入れるかよ。山田？ 山田にも言ってるねえよ。本当だって、あの場所は誰も知らないって。でさあ、太田はいっしょじゃないの？

<ポーン、ポーン、ポーン、ポーン>

なんだよ、るっせえな。夜も鳴んのかよ。なんなんだいったい。暗いな、火消えてんじゃん。あれっ、アイツ居くない？ 暗くてよくわかんないけど。まっいいや、寝よ寝よ。こんな中途半端に起きてなにしろっつーんだよ。トイレ行きたいし、のども渴いたけど我慢しよっ。寝なきや、寝なきや。背中痛えな。肩のところも。……

もう真つ暗だよ。ちよつと急がない？ 後ろから誰か走ってきてない？ 誰だろ。なあゝんだ太田かよ。びっくりさせやがって、汗かいてるよ、すっげえダッシュしてきたんだろ。怖いから。太田、今日はそーとー暗くなってるけど遅れんなよ。よっしゃ走れゝ、ハアハアハア、太田もう息切れて走れないかなあ？ おおっ！走ってるよ。やるな。鈴木と田中は、どこ行つたの？先行つちやつた？ さつきまでいたと思つたんだけどなあ。マサミ速えな、飛ばしすぎだよ。ハアハアハアミキちゃん置いていくとは薄情なやつだ。付いてこれるかな、ちよつとスピード落とそうつと。ハアハア、ミキちゃんなんで笑つてんの？ 怖くないのかな。太田は、ダメだもう見えなくなってる。かわいそうだけど、入り口で待つてやるから許せ。だつてお前は絶対俺らのことは待たないんだから。だから山田どこに行く気だよオメエは、茂みの中入つてどーすんだよ。つてもう入つてつちやつたよ。ミキちゃんと俺だけか。走るの意外と速いんだな。そんな速かつたけ？ ずっと笑つてるけど暗いの怖くないのかな、俺でもけっこうビビってるのに。えっ！ こんなときに本読むの？走りながら。転ばないかな。ポーン、ポーンまたあの音だ。なんの音だろ。ここに来るとだいたい聞こえるんだよな、ミキちゃん気になんないのかな。あつ、前に誰がいる。あれは、太田だ。なんで、いつの間に前に、っていうか痩せてる太田だ。そうだが、アイツは中学入ってから急激に痩せたんだ。卓球で。でも差が縮まらないどころかまた見えなくなつた。痩せてからはやっぱ速えな。つとミキちゃんは、いない！ おいてつちやつたかな。どーしよ。戻ろつか、いや、でも。うん？ 茂みからゴソゴソと、やっぱテメエかよ。山田、どーしよ、ミキちゃんが、なんだよ、手引つ張るな。なにに戻るのか。ええっ！ 今から。マジで暗いぞ。わかつた、わかつたよ。行くから手離せ。その代わりミキちゃん見つけたらダッシュで帰るからな。遅れんなよ。行くぞ！

うん？ なんだ？ 眩しいな。イテテ、肩から腰から、虫にも刺

されて痛いわ痒いわ。やつぱこんなところで寝るもんじゃねえよ。アイツはどこ行ったんだ、夜川に小便しに行ったのは見た感じすんだけど。俺もトイレ、痛たた、筋肉痛、もつとひどくなってるよ。立ち上がんのも一苦労だ。うゝん、ああ、まだお昼にはなってるないみたいだな。太陽は上にないし、陽差しの強さからしても。痛つ、足の皮もむけてるんだった、砂利の上なのに思いつきり踏んじやつたよ。踵に重心かけながら歩かないと。あつ！あの野郎また向こう岸にいやがる。なんで夜の間にわざわざ移動すんだ。わけわかんねーよ。しかもトランクス一枚だし。

「山」

別にいつか。起こしたところでどーなるわけでもないし。寝かせそこ。おおつ、水は相変わらず冷てえな。

「ふあゝあ」

どんくらい寝たかもわかんねえよ。とりあえず、ああ、朝起きて一発目の小便を川でやるっていうのも、って向き反対だった。方向転換、川上に向かってやつちゃっつけねえだろ。ふゝ朝から一人になにやってんだ俺は。

んしょつ、顔洗おう、ぷはつ、ふゝ目が覚めるゝ。んゝ水がおいしい。まだヤツは起きそうにねえな。焚き木の木、結局足りたんじやん。だいたい、火を絶やさないようにするって誰かが起きてなきや無理な話しじゃん。なんのために暗い中とってきたのか。

<ポーン、ポーン>

今日、一発目かよ。いやつ、一回起きたときも聞いたような。あれつ、それとも夢でだったかな？ 夜は鳴らないだろうしな。

さて、どーしょ。とりあえずアイツ起こしに行くか。また石投げてもしかないから、向こうまで行ってやるか。まさか、二日続けて起きて早々に川を渡ることになるとは。

痒い、痛い、だるい。もうなんも食うのないけど、朝は抜きか。また魚獲れないかな。雲一つないよ。今日も天気はよさそうだなー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1783f/>

うらやま

2010年10月8日13時21分発行